

グルントヴィ小伝 ——時代と思想

ポール・ダム

(小池 直人 訳)

補録: N・F・S・グルントヴィ「生のための学校」



Nikolaj Frederik Severin Grundtvig, 1783-1872

(from: J.C. Aaberg, *Hymns and Hymnwriters of Denmark*, 1945)

名古屋大学社会文化形成研究会 (FSCN)

(The Association for the Studies in Formation of Society and Culture, Nagoya University)

連絡先: 名古屋大学大学院情報科学研究科 情報創造論小池研究室

Tel: 052-789-4840 E-mail: nakoike@is.nagoya-u.ac.jp

『グルントヴィ小伝』への訳者まえがき

ここに訳出した『グルントヴィ小伝』は、すでに三〇年を経過しますが、近代デンマークの代表的思想家グルントヴィ(N. F. S. Grundtvig, 1783-1872)の生誕二〇〇周年を期して、デンマーク外務省によってアロス書店(**Aros Forlag**)から一九八三年に公刊され、近代デンマークの社会発展に導きの糸を提供した思想家グルントヴィの生涯と活動を、主に外国の読者にたいして紹介しています。じっさい、訳者もこの本の原典を日本のデンマーク大使館で入手しました。ですから、この伝記には類書にない特徴があります。それはなにより、人間グルントヴィが鮮やかに描かれていること、彼がデンマーク国内でだけ通用する隠語によってではなく、広く世界の一般読者にわかり易いことばで語られていることです。たしかに、このことでグルントヴィが用いたデンマーク語のニュアンスが十分表現されていないといううらみは残ります。ですが他方で、私たちは本書からグルントヴィの人となりについて総合的なイメージを受け取ることができます。もちろん、思想が単純化され、平板化されているわけではありません。むしろ実証的にも優れ、かつ本質的なポイントがしっかり押さえられ、様々な問題と格闘した思想家の姿が、幅広く、生きいきと記述されているのです。その意味で本書は三〇年の歳月を経てもなお内容的に貴重なものであり続けています。

このことは著者ポール・ダムの活動に負うところ大ともいえるでしょう。著者はホイスコーレ人としてグルントヴィに近い立場に身を置いた批評家ですが、社会人民党からデンマーク議会議員にも選出され、『政治家としてのグルントヴィ』(アロス書店、一九八三年)などの多くの著書を残しました(巻末の著者紹介参照)。著者の本領は、本書がややもすれば神話化され、個人崇拜の対象とされがちな「グルントヴィ」を避け、彼の多面性や人間的側面を政治的具體性とともに描き出していることにあります。著者ダムは経歴からすると社会主義者なのですが、本書を一読してわかるようにグルントヴィのなかにあるリベラルな価値を高く評価しており、同時に彼の宗教的生活も思想の核心として十二分に意義づけています。これらのことは小冊子であれ本書を、グルントヴィを知るうえで最良の入門書にしていると訳者には思えるのです。

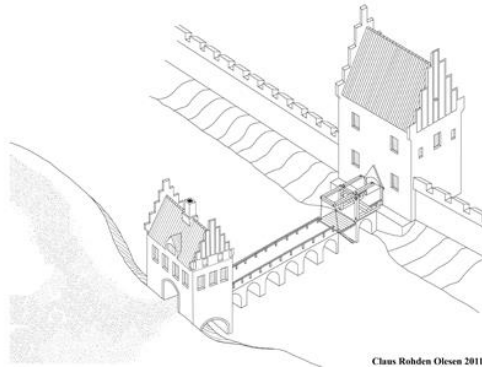
目次

凡例	3
はじめに	4
一 生涯と著作	7
[ウズビュの生活]／[ユラン滞在]／[コペンハーゲンでの学究生活]／ [片思いの恋から意欲的創作へ]／[精神的危機を乗り越えて]／ [基礎研究に専念した歳月]／[教会観の転回とクラウセンとの闘争]／ [グルントヴィ派の形成と英国渡航]／[活発な創作活動]／[デンマー クの民主化とフォルケホイスコーレ構想]／[民属・民衆性(フォルケリヘ ズ)]／[晩年のグルントヴィ]／[三度の恋慕、三度の結婚]	
二 フォルケホイスコーレ	28
[構想とその具体化]／[ホイスコーレの思想と文化の定着]／[社会的 影響]／[民衆自身の力への信頼]	
三 子どもの教育	35
[初等学校観]／[グルントヴィの教育思想]／[未来を担う人々とともに]	
四 デンマーク国民教会	38
[宗教の自由を求めて]／[国家教会から国民教会へ]／[参加者のため の喜ばしい教会]	
五 フォルケリヘズ	41
[まずは人間、而してキリスト者]／[フォルケリヘズとは]／[民衆的自由と 女性の権利の擁護者として]	
六 [おわりに]	43
原注・訳注	45
補録:N・F・S・グルントヴィ「生のための学校」	48
[死せる学校]／[健全な知性の国、デンマーク]／[デーンの女たちとともに]／[生 のための学校がめざすもの]／[民衆、市民のための官吏をめざして]／[自然で愛国的 な啓蒙]／[数学という煉獄]／[奴隷なき民属・民衆の陶冶形成に向けて]	
「生のための学校」、テキストおよび訳注	63
さらに学び進めるための参考文献	66
著者紹介	67

凡例

- 一 本書のオリジナルテキストは **Poul Dam, *N. F. S. Grundtvig*, (English translation by Reginald Spink), the Royal Danish Ministry of Foreign Affairs, Aros Forlag, 1983** である。なお印刷にさいして、出版元のアロス書店より学術目的での翻訳利用について承認を受けた。
- 二 訳出にあたって原注は[一][二][三]…の府号を付して本書の巻末に一括して掲げた。訳注は(1)、(2)、(3) ……の番号を付し、巻末に一括して掲げた。
- 三 本文中に挿入された写真とコメントは著者および訳者によるものがある。

はじめに



古エスターポート(コペンハーゲン博物館より)

およそ一八五〇年まで、コペンハーゲンはまだ古い城壁に囲まれていました。家々は曲がりくねった路地に沿って密集し、背中合わせの建物や屋根裏部屋からなる迷路のようになっていたのです。人々が新鮮な空気を求め、門楼からの眺めを楽しむために城壁のところを歩いたのはよくわかります。一八二一年には城門が夜のあいだは閉じられ、その鍵は国王に手渡されていました。一八四八年には夜の十時以降には城門からの出入りに特別な通行手形が必要でした。地方農民によって支払われる通行税が廃止されるにはさらにいっそう長い時間を要しました。農民たちは城門を通過して市内の市場に農産物を運んでいたのです。

[グルントヴィとその時代]

多くの国々の歴史で、天才的な人々が一挙に登場してくる時代があります。周知のようにそうした時代は黄金期といわれます。この現象は説明を要しません。事実として受け取られねばならないのです。

デンマークの黄金期は一九世紀中葉に現れました。その時代にあって、すでに二人の人物の名は長らく著名になっていますし、世界中に知れ渡ってもあります。つまり、偉大な童話作家であり、旅行記も書いたハンス・クリスチャン・アンデルセンと、孤独ではありましたが、重要な思想を提起した哲学者セーレン・キルケゴールです。第三の人物は亡くなる前に、すでにヨーロッパ中で有名だったベルテル・トルヴァルセンで、おそらく新古典派の彫刻家として際立った人でした。

ですが、彼らすべてのなかに最も偉大で、顕著な人物がいるのですが、その人の名はデンマークを離れるとわずかに知られているにすぎませんし、彼の思想はいまだに理解はされていないといえないでしょう。その人物こそが牧師つまり聖職者であり、詩人のニコライ・フレゼリーク・セヴェリン・グルントヴィでした。彼は近代デンマークの性格を考える上で他の誰にもまして重要な傑物だったのです。

ここで名前をあげた四人はすべて同時期にコペンハーゲンに住んでいました。この街はこの時期にしては眼を見張るほど繁栄した首都であり、一〇万人ほどの人口がありました。もちろん、これらの四人はお互いに知り合いでした。小さな世界ですから、そうならざるをえません

でした。彼らはそれぞれの思想流派や傾向を代表していましたが、しかし、お互いに共感あうところはほとんどなかったのです。人間関係でいえば、グルントヴィとトルヴァルセンはまったく違った分野で活躍し成果を残したわけですが、いちばん親しい関係でした。これにたいして、アンデルセンとキルケゴール、グルントヴィの三人は共通するところがほとんどありません。むしろこれらの三人のそれぞれが他の二人についてまったく否定的なことを語っていました。ドイツが輩出した世界的詩人ゲーテとシラーの像はワイマールの広場に並んでおかれていて、彼らの友情は人々によく知られていますが、そんなふうデンマークのこれらの三人を一緒に描こうと考える人はいないでしょう。

ですがそれでも、アンデルセンとグルントヴィ、トルヴァルセンが一枚の絵のなかで見られる場所がコペンハーゲンに一箇所だけあります。それはトルヴァルセン博物館の外壁でして、ヨーアン・ソンエが大きなフレスコ画のなかに描きました。フレスコ画は、トルヴァルセンが長年ローマに滞在した後の一八三八年に母国に帰り、その歓迎会がコペンハーゲンで行われたときのものです。その絵にはトルヴァルセンと彼の芸術作品を載せた木造帆船を歓迎するいくつかのボートのひとつに、その時代の最も著名な作家のグループが乗り合わせています。そこにはアンデルセンやグルントヴィもいます。しかし、そのフレスコ画が描き終えられたときにはすでに、グルントヴィはたんなる作家以上の人でした。じっさい一九四八年から四九年には、グルントヴィはトルヴァルセン博物館から歩いてすぐのクリスチャンボー宮殿で政治家として憲法制定議会の会合に参加していました。デンマークの議会制民主主義の基礎をすえる作業にすでに加わっていたのです。



トルヴァルセン美術館のフレスコ画

〔フォルケリなもの〕

グルントヴィは聖職者であり、賛美歌作家であり、歴史家であり、教育改革者であり、そして政治家でした。これらの領域のそれぞれで彼はいずれにしてもデンマークの同時代人の誰よりも生産的であり、独創的だったのです。彼の全著作は私たちに巨大な視野を開いてくれます。著作集にするなら、おおよそ一三〇巻にも及ぶものが必要になるとされています。まだこの途方もない数にのぼる出版企画の基金を設置することができていないのです。とはいえ、この巨大な文芸生産のごくわずかな部分しか他言語で読めるようになっていません。彼の諸々のアイデアと表現形式は特別にデンマーク風であり、他の国の人々は広範囲に学習しなければ理解に困難がありますし、そのことは容易に納得いただけるでしょう。といっても、グルン

トヴィの貢献について知識を何ももっていないとすれば、一九世紀以来のデンマークや現代デンマークを理解することなどほとんど不可能なのです。

グルントヴィのなかのデンマーク的なものとは地方主義や孤立主義のことではありませんでした。逆に、彼は世界史や文明に深く通曉していましたし、たくさんの言語を習得していました。そのなかには生きている言語も死んだ言語もありました。しかしながら、彼の出発点はデンマーク文化に深く根を下ろしたものだだったのです。彼は自分の主要な課題が、じっさいにそうだったように、デンマークの人々のために働くことにあると考えていました。彼が関心をもったのは抽象的な人間生活ではなく、民属・民衆のなかにある生活の具体的なリアリティーでした。「デンマークには、デンマークらしさがあり、それはまさに広く普及し定着したものであり、フォルクレ的なもの、民属・民衆的なもの (det folkelige) だったのです。」

グルントヴィは教会や国民の指導者になろうとしていました。とはいえ彼はいつでも他の諸グループの対極にいてずっと少数派でした。それが現実でした。彼の側に身を寄せる多くの人々がいましたが、彼に反対する人々はもっとたくさんいました。彼の誕生から今日まで二〇〇年を数えますが、彼は生涯を通じて論争的な人物でした。ある明敏な作家はグルントヴィ生誕の百年祭も同様に論争的になるだろうと预言しました。つまり、その作家は「グルントヴィにどれほど深く衝撃を受けたか」を語ったのです。グルントヴィと彼の諸々のアイディアが論争的であることは、今もなお継続しています。デンマークの反逆的な若い世代⁽¹⁾の多くのでさえグルントヴィを重用し、百年も前に彼が語り、書き、歌ったことからインスピレーションを引き出しているのです。

一 生涯と著作

[ウズビュの生活]

グルントヴィは聖職者の家に生まれました。何世代かにわたり彼の祖先はシェラン島でそれほど目立つこともない田舎牧師をしていました。一七八三年九月八日に彼が生まれたとき、彼の父親は美しい南シェランの小村ウズビュの現職の牧師でした。グルントヴィは子供のころ周囲からフレゼリークと呼ばれ、四人の息子のなかの末っ子でした。四人が四人とも後に聖職者になりました。二人目の兄はデンマーク領ギニア⁽²⁾の主任牧師でしたが、その後数ヶ月で亡くなりました。その当時の医療の知識は杜撰この上なく、じつに運まかせだったのです。三人目の兄は教区牧師で、はじめはファルスター島⁽³⁾で、後にはコペンハーゲンの北の郊外でその任に当たりました。父親の経済状態はいつも逼迫していました。とくに四人の息子を大学に遣る費用が嵩んだことが理由ですが、そのさいの負債も長いあいだ彼の肩に重くのしかかりました。家庭は物的にはそれほど豊かではなかったのです。

とはいえ、グルントヴィが振り返るたびにいつも最高の感謝の気持ちを込めて語っていたのは幼年時代の家庭でした。それは精神的に豊かでした。このことはとくに、母親のカトリネ（旧姓バン）のおかげでした。彼女は健康に恵まれていませんでしたが、それを押して、不屈の意思で家を管理し、精力的に子どもの面倒を見、初期教育にエネルギーを注ぎました。フレゼリークは四歳で読むことを習い、家が必要とするすべてのことにとりくみました。「今では彼[フレゼリーク少年]は理解できないいたくさんのことを本で読んでいました。というのは、話題が本のことだけだったので、彼は魂に取りつく悪魔のように、本に取りついたからです」とグルントヴィは自らを語っています。彼の父親はフレゼリーク少年への愛情はあったものの、母親と比べるとはるかに遠い存在でした。彼は息子が勉強のためにどんな本を読むかには無頓着で、当人任せにしていたのです。

ちなみに、両親とともに牧師館に住んでいて、身体麻痺を患い椅子にかけて子どもたちを見守った老女マレーヌ・イエンスダッターの存在はフレゼリーク少年にとって重要な意味をもっていたはずです。彼女は素朴でしたが生きいきと歌い、物語を聞かせてくれました。ですから生活のすべてを通してグルントヴィは歌や物語を、敬虔さや世俗的な知恵、一般庶民のことばの贈り物といったものの現れと見ました。彼女の唇から発せられる南シェランの方言はグルントヴィにとっては民衆的な表現の模範になったのです。彼女のことを「私のことばの先生」とグルントヴィは呼んだのですが、彼の詩のある連で、民衆のために歌おうとする者は誰も、民衆のことばを借りねばならないし、そのことばで呼吸することを学ばねばならないと書いたのです(『元旦』一八二四年)。

六歳になって学校に通いはじめたときにフレゼリークはラテン語の校長に教えを受けました。しかし、その校長はむしろ彼自身の政治的関心によってグルントヴィに影響を与えました。このことは重要といわねばなりません。というのも、その校長はフランス革命の雰囲気の中かで呼吸していたからです。このことをきっかけにフレゼリークはコペンハーゲンから届く『ベルリン時報^[1]』を読みはじめました。一八三八年に、グルントヴィはそれ以前の半世紀の歴史について連続講義を行っていますが、そのさい彼は、デンマークにおいても、広くヨーロッパにおいても、まさに重要な年、一七八九年以降の革命の諸事件をどのように追いかけてきたのか、

自分自身の記憶を辿ることができたのです。



ウズビュ教会と隣接する牧師館

この牧師館の精神によってウズビュでの幼年時代の生活はグルントヴィに深い記憶として刻み付けられました。青年時代の快活な生の印象が残されたのです。

[ユラン滞在]

一七九二年に、フレゼリーク少年はユラン半島に送り出されました。バイレ近郊のチュルゴーの牧師の館に住み込んだのです。その牧師館の主人フェルド牧師は以前グルントヴィ家の家庭教師でしたが、後にフレゼリークの兄たちを彼の家庭に生徒として迎え入れていました。チュルゴーは東ユランの丘と中央ユランのヒース荒蕪地に挟まれています。この地でフレゼリークはユランの景色と習俗から深い印象を受け取りました。チュルゴーの牧師館での彼の生活には、ウズビュでそうだったような一般の民衆とのつながりがありました。かつて彼の父親がそうしたように、フェルド牧師はフレゼリークの手にあらゆる種類の本を押しつけようとしていました。牧師が購読した巡回図書によっていろいろな新刊本が牧師館に届きます。その時代には、巡回する図書のなかでラディカルな政治的出版書が目立っていたのです。

さて、フレゼリークはチュルゴーで家庭教師から教えを受け、また本を多読して六年の後、大学への入学試験に備えてオーフスのギムナジウムに通いました。後年グルントヴィはこの期間を「自然で生きいきしたものすべてにまったく無縁で、品位を高めるものすべてが欠落しており、他方で人を墮落させ、鈍重にし、腐らせるものは満ち溢れていた」二年間だとしていました。後に起こることですが、彼が「黒い学校」と呼ぶもの、すなわち疎外的で反人間的な同時代の学校教育にたいするグルントヴィの反逆の土台はそのときにすえられたのです。とはいえ、彼はたくさんのことを学び、自分なりの読書を継続しました。とくに、それほどひどくない学校の蔵書から学びました。最初の冬のあいだ彼は、下宿していた家にある靴屋の小さな仕事場で声を出して本を読んでいた。そのことで彼は民衆向けの古書を知るようになったのですが、同時に市民向けの普通の本とも接するようになりました。

[コペンハーゲンでの学究生活]

一八〇〇年に、フレゼリークはコペンハーゲンへと旅立ち、大学入学試験に合格して大学での研究を開始しました。それは彼にはまったく新しい世界でした。地方出身の学生でしたから、彼は落ち着かない日々を過ごし、粗末な身なりをしていました。彼は「田舎者」と自称したのです。コペンハーゲンの社交生活は彼の好みには合わず、それだけにいっそう熱心に、

彼は自分の研究やその他の読書に精魂を傾け、主に純文学や北欧の物語について読書しました。一八〇一年のコペンハーゲンの戦闘^[二]は現実の出来事にかかわって短い期間でしたが関心と呼び覚めました。しかし、グルントヴィにとっていっそう重要だったことは、他のデンマークの作家や思想家たち、そのなかにデンマーク・ロマン主義を率いる情熱の詩人アダム・エーレンシュレイアー⁽⁴⁾もいたのですが、そうした人々にとっても重要だったのが、一八〇二年からのデンマーク・ノルウェーおよびドイツの哲学者の長期コペンハーゲン滞在でした。それが学識の人、ヘンリーク・シュテフェンス⁽⁵⁾だったのです。シュテフェンスの母親とグルントヴィの母親は姉妹の関係でした。熱烈な従兄弟であり、十歳年上のシュテフェンスはグルントヴィをヨーロッパ文学に目覚めさせました。名前をあげればシェークスピアやゲーテ、セルヴァンテスといったところや、さらにその他の数人になるでしょう。そのさい決定的なことは、グルントヴィがシュテフェンスの「人間的生への歴史的直観」によって靈感を吹き込まれ、「敵対者のなかで王のように支配する情熱的なことば」にインスピレーションを得たことです。

ところでグルントヴィは二〇歳で神学試験にパスしましたが、牧師になるという考えはまだ先のことでしたし、そんな若い年齢で聖職を授かることもできませんでした。彼は文学の探求に身を投じ、あてどない執筆に専念し、じっさい公刊することもないことがらを書き綴りました。そのおりに、彼は古代北欧の研究をはじめ、アイスランドの伝説を読みはじめました。ですが、こうしたことのすべてが報いられないものであり、彼に負い目を感じさせました。

そうこうしながら、一八〇五年にグルントヴィはランゲラン島のエーリュッケの荘園で家庭教師の仕事に就くことを受け入れました。じつにランゲラン島はデンマークの一部ではありますが、彼には見知らぬ土地でした。彼はそこに三年間滞在しました。そのあいだに経験したことです。一八〇七年にイギリスとの戦争が勃発し^[三]、そのさいに軍事輸送のためにランゲラン島とロラン島のあいだにある大ベルト海峡を往来する船に乗ったことは銘記されるべきです。このとき彼は若き海軍の英雄ペーター・ウィレメース⁽⁶⁾と出会い、友情を暖めたからです。ウィレメースは一八〇一年のコペンハーゲンの戦いに参加していましたが、一八〇八年にシェラン島のオッズの戦闘に斃れたのでした。



一八〇七年の英艦隊によるコペンハーゲン砲撃

一九世紀初期の不幸の後に、文学や芸術、科学の栄華の時代、すなわち黄金期がやってきました。一八〇一年のコペンハーゲンの戦闘は、海軍による「銃声が新年を告げた」のですが、そのことが、幾人かの芸術家の絵画の主題となりました。彼らは自分たちの経験や将校たちとの会話に基づいてそうしたのです。左の絵の眺望はおそらく、クリスチャンハウンの一角

にあるヴォー・フレールサー(我等の救済者の)教会の塔からのものです。左側が、閉鎖されてはいるが、巨大な艦船停泊の余地水面をもつ海軍の港であり、それは今もなおデンマーク海軍の主要基地の誇り高い旧跡となっています。

また一八〇七年のコペンハーゲン砲撃でイギリスは、焼夷性ロケット弾という新兵器を用いました。およそ二〇〇〇戸の住宅が破壊され、一八〇〇人が亡くなりました。右の絵は、英雄的であるが、炎に包まれた無益な戦闘の後に、カテドラルの周囲にいる人々が街の一区画がどうなったのか見えています。

[片思いの恋から意欲的創作へ]

とはいえ、ランゲラン島滞在中の最も重要なできごとは、グルントヴィが当の荘園の家とかかわったことでした。彼は七歳の少年の家庭教師として赴任し、後に重要な意味をもつ貴重な教育経験をしました。グルントヴィは、彼より六歳年上の少年の母親、コンスタンス・ステーンセン・ド・レスに激しい片思いの恋心を抱いたのです。彼は既婚の女性に夢中になることで失恋という深いショックを受け、意を決し自分の研究と文学的創作の仕事に帰って行ったのです。



コンスタンス・レス

グルントヴィは日記のなかでだけですが、あえてエーリュッケの荘園の女主人にたいする恋慕の情を打ち明けました。その相手であるコンスタンス・レスはほっそりとしており、快活で、魅力的で、受容的な心をしていて、「ごくわずかな動作でも喜びにあふれ、活気に満ち、潑刺としているポプラの木のように」と記されました。彼は彼女を見ながら、その青い眼のなかを深く探るようになりました。彼のことばによれば、出会ったとき「ひとりの女性である。しごく冷たい辛口批評家である私が、この上なく深く、熱烈な仕方で一目ぼれした」となっています。グルントヴィの性格からすれば、「しわがれた花のようにうな垂れる」ことはないのですが、彼の心は絶望的な愛にすぐに打ちひしがれ、そのことで人生に目覚めるようになりました。心のうちでのたたかいと苦悩によって、彼は人間として、詩人として、教会の説教師として自分を知るにいたったのです。

その時期にはまだ、グルントヴィは何も出版してはいなかったのですが、彼は将来を約束された詩人であり学者として、しだいに人々に知られるようになっていきました。彼は二〇人の学生用の学寮つきカレッジであるヴァルケンドルフの学堂に滞在が認められ、才能のある同時代の学者たちの圏域に移住したのです。

こうしてグルントヴィは、一八〇八年に寓話的作品『デンマークの仮面舞踏』(*Maskerade-*

ballet i Danmark)で文学界にデビューを果たしました。この作品で彼は、デンマークの人々が一八〇七年の敗北以降の自分たちの国の根深い墮落に真剣に向かいあっていないと酷評しました。それは激しい論議を呼び起こす質のものであり、また真剣に受け取られないものでもありました。後にいっそう大きな関心を喚起したのが同一一八〇八年に刊行されたスカンディナヴィア神話にかかわる『北欧神話記』(*Nordens Mytologi*)でした。この著作は詩的に大きな活力を示す作品であるとともに、古代北欧思想の研究にかかわってかなりの学問的前進を示すものでもありました。それは「歴史的・神話学的研究のロマン主義的転換点」とみなされ、スウェーデンでもドイツでも注目されたのです。さらにグルントヴィは、北欧の英雄的生の没落のエピソードを扱った『北欧における闘争的生の没落のシーン』(*Optrin af Kæmpelivets Untergang i Nord*, 1809)と運命の女神ノルンたちとアース神族^[四]との闘争のエピソードを扱った『ノルンたちとアース神族との闘争のシーン』(*Optrin af Norners og Asers Kamp*, 1811)で北欧の前史にかんする詩的創作を継続しました。それらはたしかに一種の劇的形式をとるスケールの大きな詩作であり、文体上の活力と鮮明な内容のおかげで刺激的でしたが、しかし意匠の面では他の詩人たちの作品より、つまり、同一の主題をグルントヴィのスカンディナヴィア前史への洞察とは違った仕方で扱った他の詩人たちの作品よりも弱々しいものといえます。

〔精神的危機を乗り越えて〕

これらの歳月に、グルントヴィは歴史や地理を教えることで自らの生活費を稼いだのですが、そのことをきっかけとして彼は広範囲にわたる歴史研究を開始しました。それが広範囲になったのは、大きなヴィジョンを生きいきと与えるために多くの教育資料を得たからですし、コペンハーゲンの児童たちにスカンディナヴィアの雄大さにたいする信念を与えようとしたためでもあったし、また彼自身がいっそう明快な視野を得るためでもあったのです。

しかしながら、グルントヴィもいい歳になり、一八一〇年に彼の父親からウズビュの家に帰って牧師補になるよう懇願されたことをきっかけに、それまでの彼の文学的、学術的活動は中断されました。グルントヴィの父親はそのとき七六歳で、自分ひとりで牧師の義務を果たすのが難しかったのです。牧師補がいなくては、彼は年金なしで引退しなければならなかったでしょうし、その結果不測の経済問題が起こったでしょう。作家として経歴をスタートさせ、順調に歩みを進めていたグルントヴィにとって、学術的生活の中断は嬉しいものではありませんでしたが、最終的にはやむをえないものでした。それでもグルントヴィは、(一八一〇年の三月の)はじめての牧師の説教試験で、試験官たちから最得点をもらいました。主席という好成績です。グルントヴィはその説教を『なぜ主のことばは彼の家から消えてしまったのか』(*Hvi er Herrens Ord forsvundet fra hans hus?*)というタイトルで印刷に付しました。しかしながら、このことが抗議と怒号の嵐を巻き起こしました。この説教のタイトルはキリストの福音をごまかす同時代の聖職者にたいする激しい攻撃を意味したのです。コペンハーゲンの指導的聖職者の何人かはショックを受けてグルントヴィを非難し、彼に懲戒処分を申し渡しました。といっても説教の内容そのものが原因というより、公刊にさいしての挑発的なタイトルが問題だったのです。

この説教にかかわるトラブルと高位聖職者周辺の思惑とがグルントヴィを精神的危機に陥れました。というのも、グルントヴィは教会を酷評する者として立つこと、つまり預言者であり

改革者として立つことが正しいのかどうか、自問しなければならなかったからです。絶え間ない活動の期間があり、そのあいだもずっと、彼は様々な作品をたくさん書きました。シンプルですがたいへん洗練された、三賢者にかかわる子どもたちの賛美歌『青き空はうるわし』(*Dejlig er himmel blå*)は、今なおデンマークのクリスマスの賛美歌として最も人気あるもののひとつとして特筆に価します。ともあれ、この活動の時期は一八一〇年から一八一一年に終了します。精神的な危機からの回復とともに、グルントヴィは刷新され、深められた知見を得ることになりました。それは、彼がキリスト抜きに生きることができない、なぜといって、そもそも人間的生そのものがキリスト抜きには生きられないからだというものでした。彼のキリスト信仰は実存的リアリティーを得て、彼にとって必要なものとなっていました。それは説教の活動においても作家活動においても伝導されねばならなかったのです。一八一二年に彼が出版した世界史研究では、歴史の進化にも歴史的諸個人にも重きが置かれていましたが、それも聖書とのバランスを考慮したものでした。大輪の詩からなる『ロスキレ韻文詩』(*Roskilde-Rim*)で、グルントヴィはたくさんのデンマーク史上の重要な男女を登場させ、彼(女)らに影響を及ぼしたキリスト教の重要な意義を指摘しました。歴史・詩的なものはこれらの作品では、キリスト教の教育活動のなかで結びつけられました。この文学形式は目立ちはしましたが、同時代人とその子孫を傷つけるような一面がありました。歴史と詩、説教を区別せず、むしろそれら三つのものがより高いレヴェルで一体化されていたのです。



古いヴァルケンドルフの学堂

ここでグルントヴィは生きた仕方で宗教的回心を経験しました。他方、ランゲラン島での経験は、グルントヴィに人間という経験を吹き込んでいたのです。

〔基礎研究に専念した歳月〕

一八一三年、グルントヴィは父を亡くしましたが、父の後釜として生計を立てる道は叶いませんでした。そこで彼はコペンハーゲンに戻り、文学や学術の活動を再開したのです。教会はしばらく彼に門を閉ざしているように見えました。グルントヴィがデンマークの聖職者たちにたいして語った激しい攻撃的なことばにより、監督や牧師の多くはグルントヴィを辛辣な人間と感じていたからです。

文筆活動再開後の歳月で、グルントヴィの最も重要な仕事は三つの翻訳活動です。つまり、スノッリの『国王たちの伝説』、サクソー・グラマチクスの『デンマーク年代記』、『ベオーウルフ』の翻訳^{〔五〕}であり、それぞれが古代北欧語、中世ラテン語、アングロ・サクソン語からの訳出でした。それらの仕事は毎年王国の国庫から支出される奨学資金と私的な資金援助によって

成し遂げられたのです。同じ人物が今では死語になっている三つの相異なる言語から翻訳することができたという事実は、大いなる学識と多大な努力の証明だったでしょう。さらにいえば、それらの翻訳書は民衆の生きいきとしたデンマーク語によるものでした。それぞれがそれぞれの仕方でスカンディナヴィアの祖先について語るこれらの書物は、素朴な普通の民衆にも読めるはずだというのが、グルントヴィの考えでした。しかし、このことで彼は、彼の受けた財政支援の特典に不満を抱く銜学者たちと衝突せざるをえませんでした。少なくとも後者の眼にはグルントヴィの翻訳はあまりに単純素朴なやり方にすぎると見えたのです。たしかにそれらの小冊子が購入され、貧しい農民の手にも届くには時間がかかりましたが、じっさいに彼のスノッリとサクソーの翻訳書は人気のある読み物になったのです。とはいえ、『ベオーウルフ』は違った運命を辿りました。というのは、『ベオーウルフ』はデンマークの先史について補足する奇妙なアングロ・サクソンの詩ですが、これまで広範囲の読者層に届けられ、周知されることがほとんどなかったからです。ですが翻訳作業のなかで、この書物はグルントヴィに歩むべき軌道を敷きました。それはまったく異なった領野を拓くものとして、彼にとってきわめて重要なものとなりました。つまり、彼はこの翻訳にかかわることで英国と緊密に接触するようになったのです。

ところで、それらの書物の研究に費やした歳月に他にも多くの翻訳が行われました。一八一六年から一九年のあいだに、グルントヴィは歴史資料も掲載する雑誌を出版しました。そのなかで諸々の記録文書や歴史解説、詩の翻訳に加え、自然および人間の原理的本性にかかわる諸論考が掲載されました。彼はまた、賛美歌の執筆も開始しましたが、当初はほとんどが諸外国のオリジナル作品を翻訳したり、それらを利用したりしたのです。

折々でグルントヴィは聖職者の地位を得ようと試みていましたが、彼にたいする聖職者たちの頑ななまでの反対がとくにコペンハーゲンで激しかったので、求職のすべての試みは不首尾に終わりました。とはいえ、王家に属する人々や行政に関与する高位の人々のなかには、グルントヴィを何とか援助しようとする機運がありました。一八二一年のはじめに彼は、応募したわけではなかったのですが、プレスターという南シェランの小さな町の牧師の地位に任命されました。ちなみに、プレスターは彼の生まれ故郷のウズビュに近く、彼の母は、父が死んで未亡人になった後に、その町に引っ越していたのです。

もちろん、グルントヴィは聖職者の地位を得たことを喜びました。そのことで彼がキリストの福音の説教ができたからなのですが、しかし、首都コペンハーゲンの諸々の図書館を利用できないことは不満の種でした。それらの図書館があつてこそ、彼は文学や歴史的作品の執筆の継続が可能だったわけです。このことから、彼は、母親が亡くなった時点で、応募してコペンハーゲンで生活の糧をえようとしていました。グルントヴィの文学活動を支援していた国王フレゼリク六世は、彼の応募に応じました。それは直接的にはグルントヴィが完成を望んでいた研究に関連するものであり、一八二二年に彼は、クリスチャンハウン地区にあるヴォー・フレールサー（我等が救世主の）教会の牧師補に任命されました。彼は四年間そこにとどまり、作家としても聖職者としても多忙な日々を過ごしました。これらの歳月に、彼の活動に多くの人々が参加するようになりました。なによりも印刷された彼の説教がその理由を物語るでしょう。

研究に専念していた歳月の後に就いた職務によって、グルントヴィは生きいきと活動する人々と親しい関係になりました。そのさい彼は一方で礼拝と説教の二重の勤めに役割を果たしましたが、他方で人気作家であり、キリスト教の復興運動家でもあったのです。彼にとっては、

まるで新しい生活が開けてきたかのような感じでしたが、この新たな視界の開けに鼓舞されて、一八二四年には長編詩『元旦』(*Nyårs-Morgen*)が出版されました。それは三一二に及ぶ十一行詩の連からなり、豊かではあるが比喩的な仕方で、グルントヴィ自身の成長と、デンマーク国家教会での仕事や、彼がこの後に会うデンマーク公衆の課題が語られています。その詩はグルントヴィの作品で最も中心的位置を占めるもののひとつですが、それまでにグルントヴィの思想に深く親しんでいない人々にも読めるものなのです。



若きグルントヴィ

一八二〇年の夏に、C・F・クリステンセンが肖像を描いたとき、グルントヴィは三六歳でした。この肖像は後に、グルントヴィの引越しとともに家から家へと移動しました。コペンハーゲンの書店は、一八二二年にその肖像の印刷版を利用しました。それは彼の、ヴォー・フレールサー教会での牧師補就任を祝うためだったのです。

〔教会観の転回とクラウセンとの闘争〕

いずれにしても、ヴォー・フレールサー教会での歳月は本質的な点でグルントヴィの教会観の解明を意味しました。若い時代の彼は、教会の基礎の全体が聖書にあるという意見をもっていました。しかし、この時期に彼は、教会は教会そのものであるという見解に到達しました。教会の伝統、とくに洗礼における使徒の告白に表現されるような伝統がキリスト信仰の基礎だということです。キリストは過去に、あるいは書物のなかで探られるのではない、むしろ生きいきとした教団のなかに探られるのであり、その教団では、人々は洗礼によってキリスト者となり、キリスト者としての彼らの生活は聖餐のなかで養われ支えられるということです。キリストが教団にたいして彼の生けることばを話すのは洗礼と聖餐の会衆のなかです。そのことばは、それが名づけるものをつくりだします。会衆は聖書が記される以前にもずっと存在してきたのです。

グルントヴィは、一八二五年の出版物によってはじめて教会会衆よりもいっそう大きい規模の読者公衆の前でこの見解を明らかにしました。その出版物は『教会の応酬』(*Kirkens Genmæle*)というタイトルでした。このように彼が教会のために行った応答は、カトリック主義とプロテスタント主義の教理にかかわる書物を公刊した神学教授H・N・クラウセンに宛てられたものでした。クラウセンは豊かな才能に恵まれ、合理主義の遺産のうえに議論を展開しました。彼にとって聖書は疑いもなくキリスト教の基礎であり、真理は叡知的理性を援用することで、その基礎から演繹されるべきものだったのです。結局のところ彼は、そうした理性によって時が経つように、人はしだいに深い理解に到達することが可能だと考えました。その思想は、キリスト信仰が歴史的に継続される会衆によって移転されると考えるグルントヴィの思想とはまっ

たく正反対だったのです。

ともあれ、グルントヴィの意図はクラウセンと議論をはじめるところにありました。ですが、二人の着想のあいだにある距離があまりに大きすぎて対話関係を設けることはできませんでした。じっさい、グルントヴィのクラウセンへの攻撃は前例がないといえるほど激しいものでした。グルントヴィはクラウセンが「キリスト教会のあらゆる敵の頭目であり、国内で神のことばを軽蔑する者たちの頭目を自称している」という断言から記述をはじめます。クラウセンが論争関係に入るのではなく、彼にたいする中傷事件としてグルントヴィに対抗する行動を起こしたことはもっともなことです。神学教授はそのような侮辱に甘んじることができなかったのです。

クラウセンの著作は忘れてしまったが、グルントヴィの著作は覚えていた後世の人々は、グルントヴィにたいする扱いが不公平だったと考える傾向がありました。ですが二人の同時代人の場合、それとは違った考えがあったと思われます。つまり、グルントヴィが自らの胸中を語り、彼の敵にたいする感情を表現するさいの性急さが、学術世界や世俗的世界の多くのリスベクトブルな人々に不快感を与えたにちがいがなかったのです。それらの人々の大部分がグルントヴィのまったく新しい教会観を理解しなかったという事実は、その状況をいっそう複雑なものにしました。

グルントヴィに検閲を科すこと、追って沙汰あるまで検閲下に置かれる、おそらくは生涯に渡って検閲下におかれる(じっさいには一八三七年まで続いた)ことで名誉毀損事件は終結しました。検閲というのは、彼が書いた原稿を警察が読んで「印刷可」のスタンプが押されるまで、彼の出版がすべて禁じられることです。その仕事は警察にはむしろ難しいことだったにちがいがありません。警察はおそらく、グルントヴィにたいして何が可で何が不可なのかを評定することはできなかったでしょう。しかし、検閲の意図が、彼の見解そのものの抑圧にあったとは思えません。たんに不安感と呼び覚まし、煽動になりうる彼の見解のある種の表現を抑制することができたでしょう。ただし一つの論文は例外です。そのなかで彼は罰を科された本での攻撃と同じことを繰り返したからですが、それ以外は検閲によって彼の手から出版を奪うことはできませんでした。とはいえ、警察によって可とされる草稿以外は自由に印刷できないという屈辱は、彼の心を傷つけるに余りあるものでした。

ところで、名誉既存事件の判決が出る前に、グルントヴィは聖職を辞していました。その理由は、一方で彼にたいして激しい攻撃がなされたことです。彼は牧師の職務遂行が困難だと感じたのです。もう一方で、明らかに小さな問題でしたが、それが彼に深い影響を与え得ました。聖アンスガー⁽⁷⁾がデンマークにキリスト教をはじめて伝道し、そのことがデンマークにとってずっと重要な出来事とされてきたのですが、一八二六年の聖霊降臨祭の日曜日は、その伝道の千年記念祭が予定され、デンマーク国家教会の特別礼拝の儀式が行われるはずでした。グルントヴィは彼の勤める教会で利用するために幾つかの賛美歌を書きました。しかし、当の聖霊降臨祭の二週間前、国家教会が認めている讃美歌集に掲載されたもの以外の讃美歌を礼拝で利用することが禁じられたのです。このことが最後の一撃となって、グルントヴィは聖職者の地位を辞しました。そのさいに二つの賛美歌が禁じられたのですが、今ではデンマークの讃美歌集に掲載された最も人気のあるもののなかに数えられています。

[グルントヴィ派の形成と英国渡航]

こうしてグルントヴィは研究に専念する生活に帰りました。しかし、そのときには一八二一年

以前の時期ように孤立したものではありませんでした。友人の輪がグルントヴィの周囲につくられるようになり、彼の仕事を熱心に励ましました。彼の説教を聴いたことのある人々は彼を忘れてはいなかったのです。まず、彼が携わった研究はキリスト教を題材としたものです。彼は一連の書物や論文を公刊し、そのなかで新たな会衆の生の観念を入念に仕上げました。それらのなかに全三部からなる讃美歌集があり、それが、現代の私たちの時代にいわれているように、「デンマーク教会の最も偉大な説教師のひとりという地位をグルントヴィに与えました」。宗教自由の論文において、彼ははじめて国家教会のなかに広範囲にわたる自由を提唱し、諸々の提案をそれ以降の彼の残りの半生のなかで継続的に仕上げていきしましたが、そのあいだに彼はしだいにラディカルになっていったのです。

たしかに、彼の生計は逼迫していましたが、国庫からの支援は継続されました。一八二八年には英国に渡航してアングロ・サクソンの諸々の草稿を研究するために、グルントヴィは補助奨学金に応募しました。彼は草稿集の編集で出版社と合意して、国家からの資金を獲得し、その後三年間にわたって毎年三か月ずつイングランドに滞在したのです。これら三回の渡航による学術的収穫は大きなものでした。とくに諸々の貴重な宝にたいして、それらはアングロ・サクソンの諸々の資料のなかに隠れていたのですが、それらの宝にたいして英国人の眼を間接的に開いたことは大きな収穫でした。グルントヴィは草稿集の編集で出版社と合意していましたが、その企画は英国の出版社に引き継がれました。よく考えてみれば、その企画を一外国人にすぎないグルントヴィが引き受けるべきだというのは恥ずかしいと考えたからでしょう。とはいえ、グルントヴィは後に幾つかのアングロ・サクソンの賛美歌とキリスト教の詩をデンマーク風につくりかえて再生させました。このデンマーク語版は今なお歌集や讃美歌集に採り入れられているのです。

しかし、上記のことよりいっそう重要なのは、グルントヴィが英国における市民生活、学究生活から強烈な印象を受けたことでした。彼はすでにずっと前からシェークスピアに惹きつけられていて、その時期にはシェークスピアを英語で読んでいました。同時代の著者たちもまた、グルントヴィに強く訴えかけていたのではありますが、シェークスピアが運命的な仕方でグルントヴィのその後の生活で最も頻繁に引用される創造的作家になりました。ですが一番重要なのは、グルントヴィが英国の活気ある市民生活に強い印象を受けたことです。彼は、その生活が英国社会の個人的自由の端を発すると見ました。それ以降のグルントヴィの四〇年の出版や政治上の生活の成功は、彼が英国で得た諸々の印象やそれらの印象から湧き起こった諸々のアイデアに基づくものだったのです。



グルントヴィの肖像

デンマークの風景画の開拓者であるP・C・スコゴーはまた、一八四一年に描かれたこの左のグルントヴィのスケッチに示されるような有能な肖像画家でもありました。その顔はグルントヴィが経てきた多くの闘いを映しています。同様のことは一八四三年にグルントヴィの本のカヴァーに描かれた絵もまたそうです。右は、当時、デンマークだけでなくイギリスとロシアでも最も人気のあった肖像画家のひとり、C・A・イエンセンの筆によります。彼の諸々の肖像画は、同時代の人物類型のユニークな画廊をなしています。イエンセンもまた六〇歳の誕生日の少し前のグルントヴィを描きました。その姿は、法衣の上に国旗ダネブロの騎士の十字を身につけています。

〔活発な創作活動〕

こうしてグルントヴィにとって英国への渡航は復活への大いなる刺激でした。そのとき以来、彼はデンマーク社会の進化にかかわって重要になるあらゆる分野でエネルギーに仕事を残しました。一八三一年に、グルントヴィは国家教会内の自由信徒団形成の認可を求めましたが拒否され、次に、彼の宗教観に関心をもつ同調者グループのために私的形式の説教を開始しました。しかしその後まもなく、クリスチャンハウンにある教会が彼の夕方礼拝のために開かれることになりました。といっても洗礼ないし聖餐を祝うことは彼には許されませんでした。この条件は、グルントヴィが考えたように、洗礼と聖餐の二つの聖礼典を会衆にとって本質とみなした人々には厳しいものを感じられたにちがいません。いずれにしても、この教会での夕方礼拝の説教をはじめて七年後の一八三九年に、彼はヴァルトウ教会の聖職者の地位に任命されました。それは高齢の貧者のための基金によってできた教会で、グルントヴィの周囲に集う会衆の居場所となる小さなチャペルがそこにありました。けっきょく彼は亡くなるまでそこにオフィスを構えて活動したのです。

この間に富裕な友人による巨額の寄付を受けることができ、グルントヴィは長期にわたって賛美歌集を仕上げる仕事に専念できました。一八三六年から三七年には、彼はたくさんの賛美歌を創作し、また古い賛美歌をつくりなおし、それらのなかから選ばれた四百点を含む彼の歌謡集『デンマーク教会のための歌謡集』(*Sangværk til den danske Kirke*)が一八三七年に出版されたのです。そこに掲載された諸々の賛美歌の一部は初期のデンマークの賛美歌の改訂版であり、一部はグルントヴィによるまったくのオリジナルです。しかし、これらデンマークのものとともに、ギリシア語やラテン語、ドイツ語、アングロ・サクソン語、英語で書かれた賛美歌を書き直して詩に再生したものもあります。グルントヴィはすべてのキリスト教共同体から最良の賛美歌を受け取り、デンマークに導入することを望んでいたのです。彼はこの仕事を驚くほど広範囲にわたって継続しました。彼の賛美歌および聖書歌謡集の完全版は一四〇〇を越える項目を含んでおり、それは大きさだけで見ると、デンマークの賛美歌作品全体のなかで最も際立った仕事です。ですが、教会がグルントヴィの賛美歌を受け入れるにあたって長い時間を要しました。かなりたくさんの数にのぼる彼の作品を含んだ賛美歌本を教会で利用してよいと許可がはじめて出されたのは一八五六年のことだったのです。それ以来、公認された新しい讃美歌集のどれをとってもグルントヴィの書いた賛美歌が掲載され、その数は増え続けていきました。彼がダヴィデ以降の最も偉大な賛美歌作家だという主張は誇張とばかりはいえないのだと思います。

さらにグルントヴィはまた、いっそう巷間に流布して人気があり、歴史的にデンマークの性格を帯びた歌謡集のテキストをたくさん執筆しました。これらの歌謡集は今なお、デンマークの様々な会合で歌われる歌謡の基本部分になっています。デンマークでの諸々の講演会は会合の歌からはじまります。ほとんどの場合、ホイスコーレで用いられるのと同じ歌集本(『ホイスコーレ歌集』)が用いられます。ちなみに、一八七〇年代の初期に、グルントヴィと連携するかたちで出された先駆的な歌集はグルントヴィによる賛美歌と歌謡がかなりの部分を占めています。彼の歌謡は通常の意味での愛国歌謡ではありません。今日の民衆生活の条件とながりをもった歌謡つまり民謡であり、過去にそれらを歌う民衆の生活スタイルが表現されています。彼の歌謡はそうしたスタイルを利用したのです。

幾つかの歌謡では、歴史や古スカンディナヴィアの神話から取られたシンボルが用いられました。それらはグルントヴィが一八三二年に出版した著作『北欧神話記あるいはスカンディナヴィアのシンボリズム』(*Nordens Mytologi eller Sindbilledsprog*)につながっています。それはグルントヴィが一八〇八年に出版していた『北欧神話記』とはまったく違った本でした。新版は傾向として将来を見すえており、復興主義的でした。神話は当時のスカンディナヴィアの人々に靈感を与えてきた諸力を公に宣言するものと解釈され、それゆえにまた、デンマークの民衆の未来がどうなるかにかかわって、諸々の預言的なシンボルとして解釈されたのです。この事象の歴史・詩的直観は数世代にわたってフォルケホイスコーレの教師たちにとって重要な意味をもつものでした。じつに、彼らにあっては、諸々の神話は人間の生活が過去にどうであって、将来どうなるかを照らし出すための光として用いられたのです。

[デンマークの民主化とフォルケホイスコーレ構想]

そしてまさにこの時期に、グルントヴィは若者たちのための学校を構想する仕事に着手しました。とはいえ、フォルケホイスコーレが最初に出現するのはしばし後の時期でした。若者のための学校構想は全体として民衆のためのものであり、少数の上層階級向けの基礎的学術として、外国の死せる言語にかなり高い比重を置く教育と対置することができたのです。

グルントヴィは、かなり若い時代から家庭教師としても他の教育活動においても教育的事象と取り組んでおり、じっさいの経験がありました。その経験は彼が既存の教育制度の基礎にある多くの価値を疑う原因になりました。彼は機械的方法、まったく死んだ素材に基づく方法を駆使する学習が生徒を怠惰にし、無関心にした、だから教育が生のための学校ではなく、死のための学校になったと考えました。青年期に教育を行うことは、さらに大きな意味があったでしょう。というのも、青年期は「精神の創造的な時期」だからでした。しかしながら、ホイスコーレ構想の発展にとって決定的推進力となったのはとりもなおさず政治的事象だったのです。

一八三〇年の七月革命⁽⁸⁾以降、グルントヴィは諸々の発展が必然的に国の統治にかかわり政府にたいする民衆参加のいっそうの拡大を導かざるをえないことを悟りました。じつは彼はこの観点を必ずしも喜ばしいものとしていませんでした。なぜなら、彼は慈悲深い絶対君主の統治よりも、多数派支配の方が自由の余地がなくなるのではないかと恐れていたからです。グルントヴィはまた、民衆の声が自由になり力強くなるまで民衆が社会的諸問題にかんして民主主義教育を受けられなければ、各界の指導者たちに過剰な権力が集中してしまうのではないかという恐れを抱きました。こうして彼は、デンマーク語を用いてデンマーク史を学ぶ民主

主義ホイスコーレの思想を提起したのです。その当時、次の時代を画する民主主義憲法が制定されようとしていましたが、その体制に参加するという観点で、誰でもホイスコーレに受け入れられ、誰でも社会的諸問題を学習できるようにしようというのですから、このホイスコーレはじつに、デンマークの近代社会の基礎となったのです。グルントヴィが「ホイスコーレ」ということばを「大学」の意味で、したがって、彼の脳裏にあったラテン語ベースの大学と同等の地位の学校という意味で用いたことはさして重要ではありません。むしろ、コペンハーゲンの大学と対照的に、彼の提唱したホイスコーレでは[聖職者や官吏など]官職、公的ポストにつながるような諸々の試験があつてはならなかったことが肝心です。じっさい、グルントヴィは一定の官職に対応する試験があるべきだとは考えませんでした。むしろ、資格を保持していると否とにかかわらず、[人間として成長して]誰もが保持できる資格、[人間として成長して]諸々の地位に就く資格があるべきだと考えたのです。



スカンディナヴィアの学問的協力

[現在いわれる]文化的政治的三位一体というスカンディナヴィアの姉妹国の思想は、一三九七年から一五二三年まで継続したカルマル連合やそれ以来の時宜に応じた政治的努力に基づく友好関係は別として、一世紀以上の伝統に基づきます。たとえば自然科学上の協力は、一八三九年にヨーテボリでの集会で提案されてからこの方のものです。ここに掲載した絵で、演壇に立つのはデンマークの物理学者で、電磁気の発見者H・C・エルステッズ(1777-1851)です。この絵を書いた画家は、一八四七年のロスキレでのスカンディナヴィア自然科学者の集会から題材を得ました。淵なしのスカルキャップをかぶって椅子に座っているのが植物学者のJ・F・ショーウ(1789-1852)で、ちょうどその後ろにいるのがグルントヴィです。その年の後、両者は憲法制定議会のメンバーとなり、ショーウはその議長でした。

グルントヴィはこれらの計画に二〇年間携わりました。国王クリスチャン八世が死ぬ少し前の一八四八年にそうしたホイスコーレを設立すべしと決定したさいには、グルントヴィの構想はほぼ成功を手中に収めていました。しかしながら、その後まもなく絶対主義が廃止され、国民自由党が権力を掌握しました。アカデミー文化のヘゲモニーの下に置かれていた当該党

派の指導者たちには、デンマークの民衆文化に基づく民衆のためのホイスコーレ設立の目的が理解できませんでした。国民自由党は民衆の教育は「上から」行われるべきだという考えをもっていました。他方グルントヴィは、デンマーク語と普通の民衆には少なくとも貴重な諸力があること、古い大学の国際的古典教育に代表される諸力を発展させるのと同じように貴重な諸力があることを確信していました。たしかに民衆の高等教育の思想を抑圧した人々が若い民主主義そのものの代表者であったことは、逆説的に思えるかもしれません。しかしそのことは、グルントヴィと既存体制との相違、つまり古い階級利害や階級文化を保持し、一定期間その保持のための政治支援をえることに成功したであろう既存体制との相違を説明するさいの好例なのです。

〔民衆・民衆性(フォルケリヘズ)〕

ところで、一八三四年以来デンマークには身分制地方諮問議会がありました。それは大きく、公正に区割りされた地域から選出された代表者からなるものでした。選挙する住民は公共の問題を議論でき、国王に勧告することのできる人々でした。当初グルントヴィはこれに懐疑的でしたが、その懐疑はまもなく克服されました。こうして彼は「民衆の声」が議会で聴取されていると宣言することができたのです。そしてフランスの二月革命⁽⁹⁾とその帰結としての政情不安が他のヨーロッパ諸国に民主的改革を促した一八四八年には、グルントヴィは確信をもって未来を見やり、「今や民衆の時代が到来した」と考えていました。一八四八年に彼は小さな週刊雑誌『デンマーク人』(*Danskeren*)を公刊しはじめましたが、それは主に民主主義的で政治的な思想を普及するためのものでした。「デンマーク人」(*Dansker*)ということばは、それ以前にはそう頻繁に用いられてはいなかったのですが、このグルントヴィの用語法が巷間に流布するようになりました。ちなみにそれはシェークスピアの『ハムレット』の用例を参考にしたものだったのです。



自由憲法体制を要求するデモンストレーション

絶対王政の統治が平和革命によって廃止された一八四八年三月二日はデンマーク史上画期的な日でした。この絵は大衆が、自由主義憲法体制の要求を携えて国王に拝謁するために練り歩く途中のものですが、ちょうどグルントヴィの家の前を通過しています。彼は街角の右側の三階で窓を開いて行進を見えています。彼の詮索好きははつきりしていますが、にもかかわらず懐疑的なところもあり、この喧騒のなかに彼は直接的に身を投じませんでした。

グルントヴィは『デンマーク人』のなかで、対独戦争にかかわってシュレースヴィとホルシュタインのデンマーク・ドイツ公国でのドイツ系住民の反乱にたいする闘争が必要になったと熱烈に書き、絶対主義に続いて生まれた民主主義体制について論じました。彼はさらに進んでキーワードが「自由」と「フォルケリヘズ」(folkelighed)である政治綱領の全体を提起しました。それは民衆の手による民主主義と呼ばれてよいでしょう。彼は経済問題における自由の提唱とともに、知的、精神的諸領域の全体においてはたいへん広範囲の、ほとんど無限と いい自由を提唱したのです。そのモデルはある程度まで英国の自由主義でした。しかし同時に、彼は新たな民主主義が民衆自身との委曲を尽くした十分な合意によって進められるべきこと、民衆を特徴づける文化や展望と一致した仕方で進められるべきことを強調しました。彼は「人民の、人民による、人民のための統治」というリンカーンのゲッテスバーグでの演説⁽¹⁰⁾のことばを用いることができたでしょう。要するにグルントヴィも、「民衆が統治することにたいする私の信頼は概して微細にわたり、民衆が統治することにたいする私の信頼は概して無制限である」と述べたチャールズ・ディケンズ⁽¹¹⁾と同じ見解をもっていたのです。

ちなみにグルントヴィは憲法制定会議のメンバーに選ばれ、その後フォルケティン、すなわち議会の衆議院議員として六五歳から七五歳まで活動しました。およそ八三歳であった一八六六年には、彼は短期間ですが上院ランズティンの議員でした。彼はほとんどの有権者が農民であった選挙区で選出されたのですが、農民たちはキリスト教復興と民主主義復興の両者によって目覚めていて、農村共同体の状況を改善するような社会経済的諸改革に関心をもっていました。自由もまた彼らにとっては生きいきとしたものであり、重要なものでした。しかしながら、グルントヴィはほとんどの選挙で、ただ社会経済的なことがらにしか関心を払わない選挙民からまったく頑固なまでの抵抗に遭遇したのです。

そのずっと前のことでしたがグルントヴィは、「私の議会的思考のすべては英国由来のものだ」と書いていました。このことは彼の議会内での行動からはっきりと浮かび上がります。彼はナマの討論を重視し、政府が正しい路線を維持するにあたって、野党と世論が重要であることを強調しました。彼自身はつねに野党に身を置き、連綿と続く政府に責任を突きつけて、とりわけ不信任の投票を実施させることで対決できるすべてのことを行いました。議会の理論にかんじていえば、その当時の彼はデンマークを含む大陸の実践よりもはるかに進歩的だったのです。

あらゆる観点からして、彼の見解はラディカルな自由主義でした。あらゆる市民的分野で思想の自由を要求する彼でしたから、そのさいにはごくわずかな人しかついていくことができませんでした。ですが長期的視点で見ると、デンマークの政治思想や立法に深く影響を与えてきたのはグルントヴィの自由にたいするキャンペーンでした。これらすべてにおいて、グルントヴィは普通の民衆の側に立っていました。「賢慮や文化、富裕さ」による通常の民衆の真の平等は、彼にとっては、民主的統治がじっさいに民衆による統治であるために必要なものでした。彼の最後の政治的努力は、一八六四年のプロイセン・オーストリアとの戦争^[六]の敗北後に実施された平等な参政権の制限にたいして頑強に反対することでした。彼は八三歳に届こうとしていたにもかかわらず、その反対キャンペーンは民主的諸権利への情熱とともにまた、先見の明のあるヴィジョンを抱きつつ行われたのです。彼は一九世紀の最後の三分の一を特徴づけることになる国内の諸々のコンフリクトを正確に予測したのです。



グルントヴィの肖像

一八四七年にグルントヴィは再びスコーゴーの前に座りました。その結果が左側の鉛筆で描かれた肖像です。おそらく彼の最盛期の最もできのよい、力強い肖像でしょう。グルントヴィ自身がとくに自分の肖像画を好んだようです。右は一八四七年に彼がコンスタンティン・ハンセンという画家を得て描かせました。

〔晩年のグルントヴィ〕

晩年もグルントヴィは、かつてつねにそうだったようにあくまで論争的でした。しかし、彼の教会にかんする見解、また民主主義と政治にかんする見解を支持する友人たちの集団は拡大し続けました。グルントヴィは、デンマーク国家の多数派部分を含む偉大なる文化民主化運動の結集点でした。とくに農民層のなかでそうでした。彼の晩年には、仲間の会合が頻繁に行われました。その会合でグルントヴィ運動のメンバーは様々な講演会を催し、歌声を響かせたのです。

グルントヴィは生涯のほぼ終わりまで活動を続け、その間に彼の初期の書物が新版で再刊され、新しい賛美歌や詩がたくさん創作されました。一番有名なものの幾つかの下りは、彼が死んだ年、一八七二年の日付になっています。

短くても長くても
我等が走らねばならない人生行路
完全な日とはすっきり目覚めた日だ
我等は人生行路を民衆のために走る
彼らこそ我等の誇り
完全な日とはすっきり目覚めた日だ
喜びがしかし、その日の夕べを迎える

思いがけない機会があって、グルントヴィの説教師としての印象は英国でスカンディナヴィア文学の知識の蓄積を鼓舞する大きな活動に身を投じた若い英国人エドムント、つまり後のエドムント卿ゴッセ⁽¹²⁾によって記録され、後世に残されました。彼はグルントヴィを「私がかつて会った最長老の人……、超自然的だがほとんどキリスト者ではない……彼は何か遅れてきたドルイド僧、モナの時代から生き続けて、死ぬことがありえないようなドルイド僧⁽¹³⁾のように見えた」と記録しています。グルントヴィの説教はその時代のテキストから「彼は我々に誤った諸々精神(精霊)を知るよう警告し、いかなる精神(精霊)もそれが神のものであるかどうかを吟

味するよう警告した」といいます。ゴッセは印象記のなかで、情感あふれる集会でのグルントヴィは、高齢だが叡智に溢れなお活力のある人という以上に意義深い人物であると描写しています。ゴッセは集会を「熱狂的で恍惚感溢れるもの」だと記述しますが、そのさい明らかに彼は部外者の視点から集会を見ていました。しかし、集会が親密なものであり続けたことはいうまでもなく明かです。グルントヴィは青年期以来、じっさいにそれこそがコミュニティーだと感じられるキリスト者のコミュニティーに希望を抱き続けてきました。彼はその希望をかなえるために生きていたのです。

きわめて高齢なグルントヴィの姿は最晩節の時点で撮られた写真によっても、ある意味で不運な結果ですが、不朽のものになっています。ですが、作家として、宗教復興主義者として偉大なことがらを成し遂げた人物には年齢は関係ありません。じっさい彼は、時代に通じ、時代と切り結んでいるかぎり、生きいきとし精力的だったのです。



最晩年のグルントヴィの写真

グルントヴィは一八七二年九月二日にコペンハーゲンの北のストアー・ツボーの彼の家で静かに息を引き取りました。写真家が、亡くなる一週間かそれくらい前に、彼の家を訪ねました。その写真家は、高齢の預言者であり成人教育の提唱者の家父長的な姿を写真に収めました。それは後世の人々にはあまりに型どおりのことに思えますが、グルントヴィの華々しい名声と彼や彼の仕事にかかわる称賛を説明するために紹介されたのです。

〔三度の恋慕、三度の結婚〕

余談になりますが、グルントヴィは三度結婚しました。二人しか妻帯経験がなかった他の牧師は多すぎると考えたでしょう。そしてグルントヴィは奥さんとは別に心底から三人の女性に魅せられました。そのことを彼は一八四四年の詩『小さな女性たち』(*Smaa Fruerne*)のなかでしたためています。

魅惑の眼をした三人の女性が
優しく微笑んだ三人の女性が
すべてを顔色なからしめる三人の女性が
キューピットの矢で私の心を射抜いた
そのなかの二人の手と唇に
私は心からの口づけを贈った

三人の女性の最初の人ランゲラン島の荘園領主の妻、コンスタンス・ド・レスで、彼女は若きグルントヴィの心のなかに溶け込んでいました。二番目の人は英国人女性クララ・ボルトンで、グルントヴィは数度の英国旅行なかで彼女に一度邂逅し、夜を徹して長時間会話をした経験がありました。その会話はグルントヴィにとって、その時点での彼の思想の解明に役立つ重要なものでした。クララ・ボルトンはまた、ベンジャミン・ディズレーリ⁽¹⁴⁾の親しい友としても知られていました。第三の女性は若い親ドイツ的な人でした。グルントヴィは、先の詩を書いた日のちょうど五日前に、その女性の会社に朝から晩まで入り込みました。彼は彼女が「老人を若返らせてくれた」と書きました。そのときグルントヴィは六〇歳だったのです。

さて、奥さんのほうですが、最初の人牧師の娘リセ・ブリヒャー（一七八七年～一八五一年）といいました。（じっさいの名はエリザベス・ブリヒャーだったようです。）彼女とは、グルントヴィがランゲラン島に行く前からの知り合いでした。二人には一八一八年に結婚する前に数年間の婚約期間がありました。彼女は物静かでしたが、忠実で心の温かい女性であり、さまざまな変化やしばしばやってくる困窮を極めた環境のもとで、不平もいわずにグルントヴィに寄り添っていました。彼女はまさしくグルントヴィの休むことを知らない広範囲にわたる心模様を理解することができたのです。リセ・グルントヴィは彼女の夫とのあいだに三人の子供を儲けました。それは息子のヨハン（一八二二年誕生）とスヴェン（一八二四年誕生）、娘のメータ（一八二七年誕生）でした。しかし、リセ・グルントヴィは一八五一年に亡くなり、グルントヴィが一八二二年から一八二六年まで説教をしていたヴォー・フレールサー教会に埋葬されました。

同年に、グルントヴィは、地主の娘であり未亡人だったマリエ・トフト（一八一三年～五四四年）と結婚しました。彼女は農民たちのあいだの宗教的、民衆的復興に長いあいだ関心を持ち続けていました。彼女は自分の所有する地所の農場を、それらを占有して耕していた人々にたいへん緩い条件で売り渡しました。この活動を通じて彼女はグルントヴィのサークルと接触するようになり、彼の最初の奥さんが亡くなる前に、グルントヴィの家を定期的に訪問していたのです。マリエとの結婚を通じて、グルントヴィの経済環境は改善され、彼の生活はたいへん快適なものになりました。マリエはもてなし上手で、この結婚の歲月には、彼らはグルントヴィの幅広い政治的友人のグループ、とくに議会の農民メンバーのグループに家を開放し続けました。グルントヴィとマリエは精神的に似た者どうしで、彼女がグルントヴィに大きな影響を与えたのです。しかしながら、結婚生活は短期間に終結しました。一八五四年にマリエは、二人のあいだの息子フレゼリクが誕生した数か月後に亡くなったのです。

もちろんグルントヴィは愛しいマリエの死を深く悲しみました。しかし、彼は七五歳になった一八五八年に、もう一度結婚しました。この三番目の奥さんは彼の長男よりも若い未亡人でした。彼女は、アスタ・リーツ（一八二六年～九〇年）で、生まれながらの古いデンマークの一貴族の家柄のクラウ・ジュエル・ヴィン婦人でした。彼女の最初の夫は一八五〇年から五一年まで外務大臣を務め、一八五七年に亡くなっていました。『私のアスタ』という詩で、グルントヴィは次のように書きました。

妹みたいだったのが私の最初の妻・・・
これ以上の牧歌的な生活は
この地上に住まうことはない

母のようだったのが私の二番目の妻・・・
その生活は大胆でロマンティックだった・・・
娘のようなのが私の三番目の妻・・・
この生活はとてもすばらしい・・・

この第三の妻アスタがグルントヴィの生涯の最後の一五年間の面倒を見たのです。このときもマリエの時代のように、家が多くの人客に開放されました。しかし、アスタは[国教会]監督の妻であるという誇りから、夫を熱烈に賛美しすぎたので、前妻マリエによって設けられたような辛らつな批評空間の余地はなくなりました。グルントヴィは、アスタのサークルに集う「賛美する婦人たち」の人客よりもむしろ、その他の訪問客を歓迎しました。そのときには、実際の生きた議論の機会があったからでしょう。アスタとのあいだで、グルントヴィは娘を儲けました。彼女はグルントヴィが七七歳であった一八六一年に生まれ、彼の三人の奥さんの名前にちなんで、アスタ・マリエ・エリザベスと名づけられたのです。



最初の妻リセ

グルントヴィの最初の妻リセは性格的に物静かで、慎み深いけれども、重要な女性でした。いわば彼女は鳩でグルントヴィは鷹でしたが、彼だけは、どれだけ彼女に感謝しなければならぬか知りすぎるほど知っていました。彼が激しい闘いのなかで教会を辞したいと願ったときのある晩、彼女は彼の傍らに近づいていました。「私は何があなたを悩ませているかよくわかるわよ、グルントヴィ。あなたは私や子供の生活のことで不安をもっているのよね。だけど、私たちのことは忘れていいわよ。私たちの主があなたに命じることを積極的に実行していいのよ。主は私たちにどうパンを与えたらいいかを知っておいでなのよ。」彼女が決定的な瞬間に彼を励ましたように、後に彼女は力強く、根気よくこの歩みの結果を耐え忍んだのです。



二番目の妻マリエ・トフト

古ケーエゴーの出身のマリエ・カールセンは、写真からうかがえるように、誇り高い大邸宅の女主人で、グルントヴィに人生のロマンスを提供しました。しかし、それはわずかのあいだ

でした。彼女は静かに息を引き取ったので
はじめのうちは、グルントヴィはそれが真実だとは考えられませんでした。

彼女は死んでいない。ただ眠っているだけ
彼女の頬は暖かい
私はその日の夕方にそういった
そのとき彼女が永遠の眠りについた
全女性のなかでいちばん優しい人

[グルントヴィの死と彼の遺産]

高位聖職者の多数派には不満でしたが、グルントヴィは一八六一年の彼の聖職叙任五〇周年にあたって名義上の国民教会監督に任じられました。その一一年後の一八七二年九月一日に彼は亡くなり、大きな葬儀が催されました。葬儀は、グルントヴィが五〇年前に聖職者として勤めていたヴォー・フレールサー教会で行われ、聖職者や王室、政府当局の代表を含むたくさんの人々が参列しました。参列した人々の大部分は教会の外に立っていました。教会は参列者をすべて収容しきれなかったのです。

また、数日後の仲間たちの年次会合が催されました。しかし、グルントヴィの遺産があまりにも偉大で多岐にわり興味をそそるものでしたから、彼の仲間たちはその遺産の全体を受け入れることができませんでした。特定の部分が彼の遺産のなかで最も重要だというような合意も成り立ちませんでした。この状態はそれ以降も変わっていません。グルントヴィの遺産は近代デンマークのたいへん多くの分野で跡づけることができます。しかし、次節に示すような論点は頻繁に取り上げられ、論じられてきたものといえるでしょう。



アスタとグルントヴィ

マリエの死後、グルントヴィを来訪した客は彼から「人間的な悲しみと寂寞とした孤独」といった印象を受けました。しかし第三の妻アスタを見つけたとき、「奇跡」が起こったとグルントヴィは叫びました。彼女はグルントヴィがとても恋しかった暖かい心をもっていました。彼は自分側からすると、彼女を教育したいという要求を満たすことができました。そのことで彼女は精神的助言者として経験を積んだのです。彼らは十年間一緒に暮らすことを願ったのですが、じっさいには一四年間になりました。その期間、彼女は、高齢のグルントヴィが快適で楽しく暮らせるよう、家を訪ねた友人たちとともに競い合いました。



グルントヴィの書斎

スター・ツボーにあったグルントヴィの書斎は、彼の大きな図書館の一部にすぎませんでした。グルントヴィはずっと出来事の行方を注意深く辿りながら、ほとんどの時間をここで過ごしました。彼はきわめて高齢ではありましたが、最後まで心的な諸能力を維持しました。彼は、午後の憩いのあいだに「秋の陽が沈むように眠り」に落ちたのですが、その前日もいつものように精力的にヴァルトウ教会で説教をしたのです。



ケーエ郊外にあるグルントヴィの墓

ケーエ市郊外のオースの森の淵に記念の墓があります。それは一八五三年にグルントヴィによって古ケーエゴの家族の埋葬の地として新設されました。この地は彼の生まれたウズビュとコペンハーゲンのあいだにあり、彼は自分の希望でそこにある低いアーチの納体堂のなかに、第二番目の妻マリエの隣に最後の憩いの場を見つけたのです。第三番目の妻アスタは、そのアーチの納体堂の外に埋葬されています。彼女は最初にここに埋葬された人でクララ・カールセンの妹でした。後者が埋葬されて以降は、この場はしばしばクララの教会の庭といわれているのです。

二 フォルケホイスコーレ

〔構想とその具体化〕

多くの人々はフォルケホイスコーレが、グルントヴィの最も偉大な達成だと考えています。いずれにしても、教育的革新がグルントヴィの思想をたいそう遠隔の地にも伝えたのです。

すでに見ましたが、フォルケホイスコーレ思想のオリジナルな発想がどこから出発したかといえば、政治的、民主主義的な問題です。グルントヴィは、社会的問題に参加するための準備となる若者のための学校が必要だと考えていました。このことはその出発点と題材とを言語や歴史、デンマークの民衆・民衆の個性に採るという仕方を実現されるはずでした。彼が述べているように、そのじっさいの仕上げは、ケンブリッジ大学の〔トリニティー〕カレッジにモデルを求めることになりました。イングランド訪問の期間に、そうしたカレッジがグルントヴィに深い印象を与えたのです。彼にとって、カレッジの生活はたとえばコペンハーゲン大学の状態とは先鋭な対照をなすものとして際立っていました。じっさい、彼はデンマークの小都市ソーアにフォルケホイスコーレを設立する着想を得たのです。ソーアには大学と同等の地位をもっていたアカデミーがありました。〔そこでは〕以前は真の社会科学への最初のアプローチとしてかなり近代的スタイルの教育が実施されていましたが、前途を拓くには問題を十分に議論する必要があります。さらに、当該アカデミーはかなりの基金を保有しているという利点がありました。この計画は、成功すれば高度な実学レベルの教育をとまなう民衆大学として結実していたでしょうが、実現しませんでした。とはいえ、計画はけっして忘れ去られたわけではありません。「ソーアの学校」という名で、その構想は繰り返し想起され、今日、フォルケホイスコーレ一般の、一種の思想的上部構造として生き残ったのです。

じっさい、グルントヴィのホイスコーレ構想が実現されたときには、すでに改造されていて大掛かりなものではなくなりました。大きな学校ではなく、たくさんの小さな学校がつけられました。それはたんに時代の径路の上にあり、それらの学校の幾つかが大きなものになり、オリジナルの構想と十分に比べられるようになったのです。

ある意味で小さなフォルケホイスコーレも、〔ソーアの学校のような〕大きな国立学校と同じように、民衆生活へのグルントヴィの基本的アプローチと合致していました。というのも、小さな学校は私的イニシアティブで創立され、農業に従事する地方の圏域にかなり依存していました。長期的に見れば、フォルケホイスコーレが民衆自身の手で創られ、公的なお膳立てによらなかったことにはきつと優位性があつたはずです。

最初のフォルケホイスコーレは一八四四年に、スレースヴィの純粋にデンマーク語を話す地域にあるレディンで創立されました。このことはまさに、デンマーク住民がドイツからの強い圧力を経験していたスレースヴィの国民的闘争に原因があつたことは事実です。グルントヴィは学校の創立を激励しました。彼は北スレースヴィの大きな公的会合で、「人々に彼らの母語を尊び、使用することを教え、デンマーク語を話し続けるだけでなく、デンマーク語で話しかけられ、相談を受け、デンマーク語が聞かれ、どんどん話され、デンマーク語で支配され、統治される自然な権利の主張を教えることができるのがホイスコーレ」であるはずだと話したのです。開校の辞で、グルントヴィの大いなる賛美者であつた校長のヨハン・ヴェグナー⁽¹⁵⁾は、学校の目標について、次のように述べました。

「若者がここで学ぶことはただ、考え、話し、書くこと、しかも明快に、朗々と、分別をもち正確にそうすることだけでしょ。しかし、[フォルケホイスコーレでの]この学習は国民的、民衆的な仕方と与えられます。若者たちの心には祖国への愛、祖国のことば、その歴史、祖国の歩むべき様々な道、諸々の慣習、諸制度が染込むにちがいありません。しかし、彼らは祖国の民衆の長所も欠点も知るようになるでしょう。こうしたことがなければ、すべての学習は悲惨なものです……。こうしたことがなければ魂がかたちづくられませんし、心は改良されません。こうしたことがなければ、農民は共同体のなかでけっして独立することができないでしょう。こうしたことがなければ、農民はあらゆる人々に依存するでしょうし、あらゆる機会にあらゆる人々の援助に頼らねばならないでしょう。それらの人々が当の農民の敵であっても、農民がそれらの人々を敵とわかっていても、そうするでしょう。」

こうして発端からフォルケホイスコーレは農民層と他の社会集団との平等を保障する手段になったのです。このことはグルントヴィの期待と十分に合致するものでした。ヴェグナーの開校の辞はグルントヴィにいったい言及していませんが、じっさいにはグルントヴィとの密接なやりとりの後に書かれたように思われるのです。

とはいえ、グルントヴィは一度もレディンを訪れませんでした。しかし、彼はレディンの学校の発展を親身になって見守ったのです。じっさいヴェグナーに続く校長たちはグルントヴィとの相談の上で任命されました。他の初期の幾つかのフォルケホイスコーレもまたグルントヴィと密接に連携しながら創立されました。後世に最も重要な意味を残した学校は一八五一年にクリステン・コルによって創立されたものです。コルは学校を家庭のような環境にし、学校の生徒と、彼らの技能に対応して簡潔な仕方と話す特別の才能があったのです。



開校当時のレディン・フォルケホイスコーレ

レディン・フォルケホイスコーレはスカンディナヴィアにおけるその種のホイスコーレとしてはじめて一八四四年に創立されました。フォルケホイスコーレ運動が最初の一〇年に獲得した支援がその重要性を物語っています。一八六三年までに一五校、一八六五年から六七年までに新たに二五校が開校しました。同時に、運動は素早く他の諸国に、とくにスカンディナヴィア諸国(ノルウェーでは一八六四年、スウェーデンでは一八六七年、フィンランドでは一八八九年にそれぞれ開校)に広がりはじめ、二〇世紀になって、イギリスやドイツをはじめ多くのヨーロッパ諸国、南北アメリカ、さらに[一九八三年時点で——訳者]、とくにタンザニアで関心の盛り上がりが見られます。

[ホイスコーレ文化の定着]

一八五三年に古希を迎えるグルントヴィーのために、彼の名を冠するであろうホイスコーレの開学の基金集めが行われました。この学校は、二回の中断がありましたが、今もなお存在しています。グルントヴィーは、彼の定義する学校であるはずの諸々のフォルケホイスコーレの哲学、諸々の観点の形成の仕事を手がけました。もちろん、それらの学校は若者に心と知恵を用いるよう教えるはずでした。それらの学校は他のどこにもまして、「いっそうの励ましがあり、いっそうよい案内がなされる」はずの場でした。しかし、「心と知恵はけっして人間の全体ではありません。ですが私たちに学校通いや教会への参集が必要であるのは全人となるためです。」学校は理にかなった仕方で「成人のためのフリースクール」であるべきであり、「通常経験するのにまして、人々を人間的生一般およびデンマーク民衆の人間的生、そしてとくにデンマーク人の人間的生に覚醒させ、それを育成し、かなり高度に解明する」よう努力しなければならないのでした。グルントヴィー自身のことばで要約すれば、「デンマークの若者が引き受けるだろうし、引き受けねばならない人間的生に覚醒させ、それを照らし出すこと、そのことがデンマーク語フォルケホイスコーレの唯一の目標」ということだったのでしょう。このことの意味は、当の学校が人生行路の全体なかで若者に恩恵を与えられる場所だということだったのでした。

口承伝達による教育に大きな力点を置き書物を主にしないことは、グルントヴィー派フォルケホイスコーレの伝統の一部です。「生けることば」によるやりとりはありましたが、このことばは口頭表現と同じではありません。語られることばが書かれることばと同じように死んだものでありえるという事実、語られることばの多くが本から採取できるという事実をグルントヴィーは知っていました。彼自身が本の虫であり、本の書き手でした。彼自身の蔵書はたいへん広範囲にわたるものでした。彼が理解した「生けることば」は、ある部分で神の私たちにたいすることばを意味しました。そのことばは、「それが話題にすることがらを創出し」、ある部分で、一人の人間から他の人間に移転され、「私たちが私たち自身でお互いに現れあう唯一の仕方」を意味したのでした。「生けることば」は独白によっても聴くことができますが、主としては対話のなかに見られるものであり、グルントヴィーはじっさいに、教育が行われる形式として対話を講義以上に強調したのでした。



二〇世紀転換時のアスコー・フォルケホイスコーレの様子

一八六四年までに、レディン・フォルケホイスコーレはデンマーク愛国主義の前哨でした。しかし、一八六五年から一九二〇年まで、ホイスコーレは国境の北のアスコーに再配置されなければならませんでした。この絵で、画家はおおよそ二〇世紀転換時のグルントヴィー派の講義風景をカラフル

に描いています。そこには学校長のルズヴィ・スクレザー⁽¹⁶⁾ や[ホイスコーレの]「乗組員」が演壇のところにいます。スクレザーは「生けることば」についてのグルントヴィの思想に大きな影響を受け、それらのことばを現実のなかにどう翻訳したらよいかを誰よりもよく知り、抜きん出た雄弁によって聴衆を集め、権威を得ていました。

いおうとすることがたくさんある場合にしばしば起こるのですが、グルントヴィの場合、彼が語ったことは実践というよりむしろ理論として残されました。それは、彼が友人たちからたいへんな尊敬を受けたため、友人たちがグルントヴィとじっさいに対話にすることがごく稀だったからでもあるのです。とはいえ、彼は基本的立場をけっして放棄しませんでした。それはフォルケホイスコーレの場合には教育プログラムの部分として公認され、その結果、ホイスコーレでは教師に質問を受けるのが生徒ではなく、教師に質問するのが生徒であるということになりました⁽¹⁷⁾。グルントヴィは本に基づく教育を嫌いましたが、そのことは本で読めることの啓蒙が唯一本当の啓蒙だという迷信を嫌うことだったのです。

しかし、フォルケホイスコーレは長いあいだ貧しい学校でしたし、その生徒たちも本を買うお金をもっていないでして。そうした理由から、口承教育が、とくに諸々の講義の形式で広く行われるようになりました。グルントヴィ自身は、一人の講師としての彼自身の活動を通して、これらの講義のためのパターンをつくっていました。このパターンはまず、一八三八年に[『男の回想』として行われた]同時代史にかんする長く続いた連続講義にはじまりましたが、それが、じっさいに人気のある講義、いわばそのまま教育的であり生きている講義を行うことのできた教師たちに採用されました。同時に、このパターンは生徒にとって資格のある教師として、教師自身の基準にも適用され、不幸にも、このパターンを用いる能力に欠けているような教師によっても採用されたのです。デンマークにおけるフォルケホイスコーレ運営のすべての試みがグルントヴィの思想に合致していたわけではないという事実もあり、それを隠す理由はありません。しかし、学校はつねに自発参加に基づく自由で独立的な学校、つまり、需要と供給のリベラルな法則にもとづく学校でした。それらが生徒の必要充足に失敗した場合には閉校になったのですが、そのことはまさにグルントヴィのリベラルな精神のなかにあったことなのです。

グルントヴィのフォルケホイスコーレの成功は、一八六四年の対独戦争の敗北直後の数年に、顕著なものになりました。新しい学校長たちはすべて、いわばグルントヴィの周辺にいた人々でした。彼らの学校はまもなく大きく成長し、どこでも参加者が一〇〇人を越え、グルントヴィが亡くなった一八七二、七三年には三〇〇〇人近くの人々がそれらの学校に参加しました。

講義に加えて、歌唱がグルントヴィ系フォルケホイスコーレの特徴になり、そのさいに利用する歌集が出版され、関係者の圏域をはるかに越えて大きく普及しました。国じゅうの家庭で歌うことが慣習になったのです。とくに二〇世紀には『フォルケホイスコーレ歌集』がほとんどのタイプの学校に導入されましたが、それは、グルントヴィ自身が書いた歌が多く含まれていることを重要な特徴としています。彼自身がホイスコーレで利用する初版の歌集の内容構成にかかわる議論に参加しました。『フォルケホイスコーレ歌集』は長年のあいだに一五〇万部を越えるほど印刷され続けました。今人口にして約五〇〇万人の国デンマークに、です。会合で歌うのに適した調子にする必要があり、それが特殊なデンマーク音楽の伝統を創出しました。そのさい輩出した人材で二〇世紀の著名人といえば、カール・ニールセンであり、トーマス・ラ

オブなのです⁽¹⁸⁾。

[一八四四年に]レディンで開校されて以来、様々なフォルケホイスコーレが設立されたり閉校したりしながら、[一九八三年の段階で]一四〇年が過ぎました。新しいホイスコーレが閉校した学校に代わって次々に出てきたのですが、今日でもその必要性が低下したということではありません。たしかにかたちは変わりました。学校と生徒にたいする財政支援法がそれらの経済的環境を変えました。しかし、肝心なことはグルントヴィやコルの遺産が生き続けていることです。学校は今でも、試験の準備ではなく、人生に向けて準備をする成人のための自由で独立的な学校です。かなり実質のある公的支援があるにもかかわらず、個々の学校には教育にかかわる裁量や知的基盤の選択にさいして十分な自由があります。幾つかの学校はあらゆる観点でグルントヴィのアプローチに専念しており、他方で、他の学校はキリスト教の異なったコンセプトから靈感を受け、あるいはまったく人道的ないし連帯的見地に基づいて運営がなされています。グルントヴィ自身はこの多元主義を是認していたでしょう。彼自身の見方は異なった考えをもった他者を許容することを妨げませんでした。彼は彼自身にも、彼の友人たちにも同じように自由があることを望んでいたのです。

〔社会的影響〕

デンマーク国民にとってフォルケホイスコーレの重要性を正確に評価するのは難しいことです。ですが注目できることは、ホイスコーレの発展が一般に住民の知的蓄積や社会参加者の増大と相即しており、様々な学校とその生徒だった経験のある人々のまわりに、とくに農村地域で各種の団体結社が豊かな仕方で進行し、発展したことです。一九世紀にはデンマークのそれぞれの教区すべてに、講演の会合や若者クラブ、体育団体が生まれ、そこでホイスコーレの参加経験者が活動的なメンバーとして目立っていたことです。フォルケホイスコーレの教師たちやこの圏域から育った他の人々が講師役を務めました。グルントヴィの伝統のなかのポピュラーな講義が、国じゅうの人々を惹きつけ、活発な討議を引き起こすことは今日でもなお変わっていないのです。

諸組織や地方自治体議会、国会で長年のあいだ選ばれたリーダーの多くが以前はフォルケホイスコーレの生徒でした。今日でもなお、どの政党に帰属するかを問わず、あらゆる政府省庁が、以前の教師であれ生徒であれ、フォルケホイスコーレを背景としたスタッフを擁していることは本当のことなのです。

とはいえ、農業協同組合運動とフォルケホイスコーレとのあいだには特別な関係がありました。多くの教師や参加経験者が組合運動のなかで目立った地位に就いていました。このことから推論されてきたことですが、フォルケホイスコーレは生徒が学校に参加したさい、その場で後に起業し、事業を運営することが奨励されたというのです。しかし、事実はおそらく違います。生徒がフォルケホイスコーレに行ったこと、その後に彼らが自発的に農業協同組合や他の諸組織の地位に就いた一連の流れは同じ一貫したエネルギーの発露であり責任の感覚だったでしょう。若者が酪農協同組合や小売協同組合の組織で働くというはっきりした目的をもってフォルケホイスコーレに参加した多くの事例もあります。さらに面白いことには、フォルケホイスコーレに参加したことのある若い協同組合活動家がしばしば、同時に農村文化の創出者であり、ただ経済的、職業的諸事象に携わっていただけではないという、地方史研究によって示された事実があります。生の総体のための教育が国の田舎教区に深い印象を残した

のです。



イエディン酪農協同組合

グルントヴィは、精神的で国民的な再生にとって疑いのない源泉を見ることで、民衆意識を深く掘り進めました。そのなかから近代デンマークが興隆したのです。彼が開始した運動の連鎖における高度に明快な成果は農業協同組合運動でした。一八八二年に西ユランのイエディンの酪農協同組合がその嚆矢でした。その数は一八九〇年までにおよそ七〇〇、一九一四年までに一五〇〇を越え、農村地区のほとんどすべてにひとつの割合ででき、その数は今日もほとんど同じです。しかし、その当時酪農製品は馬車によって日々届けられるものでなければなりません。小さくて単純な酪農協同組合は農民たちに彼らの独立性を損なうことなく大規模生産のあらゆる利益を与えました。したがって、酪農に続いてまもなくベーコンの協同組合工場や他の企業が発達しました。この協同組合という装置の全体は初期において市場の要求に適応する等品質の生産を可能にしました。こうしてデンマークの農業輸出が離陸したのです。

フォルケホイスコーレが開校されたとき、そこに参加したのは主に、地方の共同体出身の若い男性であり、まもなく若い女性も加わりました。そのことは当時の住民の大部分が農村に住んでいたことを考慮すれば自然にわかることです。主に関心を引いたのは農業共同体[に生まれた人々やグループ]が他の社会グループと対等平等性だということでした。フォルケホイスコーレが全体として国民のためにあるべきだということは、グルントヴィが常々希望していたことでした。彼は農民が、いうならば都市の職人や労働者より上等であり、優れているとは考えなかったのです。しかし、純粋に社会学的理由から、学校の環境は農村住民から大きな文化的刻印を受けたため、全体としての国民のためというグルントヴィの学校思想が国じゅうの若者に及ぶには長い時間がかかりました。一九二〇年以来、労働運動は独自のフォルケホイスコーレを保持していますが、それはグルントヴィの遺産を尊重し、それに習うことを原則として運営されています。しかし、フォルケホイスコーレが一般に都市の若者と接触するようになったのは第二次大戦後のことにすぎません⁽¹⁹⁾。近年では、長期であれ、短期であれ毎年約一万人がホイスコーレのコースに参加し、デンマーク全体でホイスコーレの数は九〇校以上を数えているのです⁽²⁰⁾。

〔民衆自身の力への信頼〕

すでに述べたように、たとえばホイスコーレへの参加と農業協同組合運動への参加経験者

との直接的関係は正確に証明することができませんが、グルントヴィや彼の友人たちの仕事ははっきりと地方住民が自信をもつよう励ましました。グルントヴィはデンマークのフツアの民衆のなかに解放されるのを待っているエネルギーがあること、彼らは相互になんらかの貢献ができるし、貢献しなければならないことを徹底して主張したのです。こうして、グルントヴィは、多くの地方の集団による彼ら自身の酪農協同組合や小売協同組合、他の協同組合の設立の明白な前提であった自己認識の醸成を支援しました。とはいえ、民主主義的経済革命を意味する農業協同組合運動は、民衆のなかに民衆自身の諸々の潜在力や諸能力にたいする信頼を生み出した民主主義一般が再生しなければ、したがって既存の民主主義の再生がなければ考えられなかったといえるでしょう。

三 子どもの教育

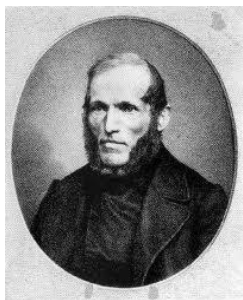
[初等学校観]

ところで、グルントヴィは教育にかんする著作ですべての形式の教育をカバーして論じましたが、けっして子どもの教育について包括的見解を示してはいません。にもかかわらず、彼の見解は主として間接的に、デンマークの子どもの教育にとって最も意義あるものであり続いています。

質的には様々でしたが、一八世紀デンマークのほとんどすべての教区には子どものための学校がありました。そして一八一四年には、七歳から一四歳までの子どもに一般的な教育義務が導入されました。この改革はその導入以前の期間における教員養成訓練のカレッジの成果によって可能になりました。改革によって数年という短い期間で住民の大部分がかなり高水準の知識に到達するまでになったのです。教育義務が少女たちにまで拡大したことはとりわけ際立ったことです。彼女らは、それ以前には既存の自主教育に少年たちが通っていたのと同じレベルで加わってはいなかったのです。

もちろんグルントヴィは、知識を嫌悪してはいませんでした。しかし、彼は一般的義務あるいは強制の原理に強く反対していました。それゆえ彼は教育における義務の正当性を疑っていたのです。じっさいグルントヴィは教育義務が国家の道具になると見なし、その考えに強く反対しました。とくに住民のなかの貧しく素朴な層にとって、教育義務は住民を権威当局の願望に即してかたどるための「強制訓練制度」だと論じたのです。教育義務は怠惰と無関心を促進するだろうと彼は考えました。教育は市民性、シチズンシップを目標としてなされるべきで、そのことで、児童にとって最良の学校は「よき市民の家」だとされたのです。

グルントヴィにとって理想の教育は家庭で行われ、親の責任が公的制度に吸収されてはならないことでした。それに続く発展は、グルントヴィの議論とその関連での彼の友人から恩恵を受けています。こうして現在の憲法は、①すべての子どもには公的に維持されている学校で自由な教育を受ける権利があること、②すべての子どもが同等の教育を受ける保障を必要としても、どんな親も、自分たちの子どもを既設の学校に遣る義務はないことを宣言しています。じっさい、このことが意味するのは、少数の子どもが家庭で親から教育をすべて受けることであり、多数の親は親と教師によって共同管理される独立学校に子どもを通わせるという選択を行うことですし、独立学校はその維持費用の大部分を公的基金から受け取るということです。これらの独立学校の幾つかはそのプログラムで、グルントヴィとコルによって敷かれた基礎の上に運営されることを宣言し、じっさいの学校人はグルントヴィの見解と近い考えをもっていました。しかし、グルントヴィの見解と十分に合致する仕方で一般的に受け入れられた自由の諸原理は、独立学校が[グルントヴィとは]別の基本見解によって設立できるし、設立されていることをもまた意味しているのです。



コル

ユラン出身の教師クリステン・コル(Kristen Kold, 1816-70)は、グルントヴィの教育思想をごく慎ましやかな人々の住む地域で最初実践しました。コルの性格からしてある種の変人だったのですが、彼は、もう一人のソクラテスのように若者を惹きつけて魅了し、彼らに質問し、彼ら相互に聞く耳をもち、考え合うようにしました。彼は「一度生徒のねじを巻けば、彼らはけっして立ち止まらないだろう」ということばを残したのです。若者男性のための五か月の冬学期と若者女性のための三か月の夏学期で、教師と学生が同じテーブルを囲んで食事を取る家庭的雰囲気があり、学校長が主に講演する自由な「歴史・詩的」講義が行われました。そうしたコルの学校が他のどの学校にもまして未来ためのモデルをつくるようになったのです。さらにコルは、デンマークの「フリースクール」の創作者で、結局のところ彼もまた普通の子どもの教育に影響を及ぼすようになったのです。

[グルントヴィの教育思想]

さて、グルントヴィによれば子どもの教育は、生きいきとし、自由で自然なものでなければなりません。どんなかたちの暗記学習も禁じられ、教師の口承の語りや歌唱、遊びに重点が置かれたのです。何かを学ぶこと的前提は、まず第一に生徒が学校を好きになり、学校が生徒に与えるものを生徒が好きにならなければならないのです。グルントヴィの教育思想の中心点は、学校において様々な主体のあいだで、教師と親とのあいだで、教師と生徒のあいだで「生ける相互作用」がなければならないという主張でした。期待されるのは「講習」や「試験」ではなく、自由な会話でした。この点でグルントヴィは、私たち自身の時代に行われている「双方向的」コミュニケーションに必要な議論を先取りしていたのです。

そのカリキュラムは、「読み書きそろばん」の基本技能を身につけることとともに、グルントヴィの観点で、子どもたちが諸々の動物や植物に親しく接し、生の実践的なことがらに従事する機会を組み込むようなものでした。歴史や宗教は教師の物語によって、そして歌によって知識の伝授がなされました。後者の歌への貢献にかんしては、グルントヴィ自身が「学校が生きいきとするために」たくさんの歌詞を書きました。その題材は聖書の歴史や世界史、デンマーク史から採取されたのです。これらの歌の多くが今でも独立学校や準備学校で利用されています。子どもの知恵はこうして感情的生活を育み、豊かな経験の要素を含む、そのことで子どもの発達がさらに促進されるとしたのです。

一点敷衍しますが、グルントヴィの教育観は多くの抵抗を呼び覚ました。彼の諸々の観点はそれが十分展開された仕方で理解されないでしょうし、未だに理解されていないでしょう。彼がはっきりと強調したのは「信仰は学校で扱う問題ではない」ということでした。つまり、子どもをキリスト者にするのは学校の課題ではないし、課題である必要はないということでした。だ

からとくに、宗教指導の義務は廃止されるべきだとしたのです。このことは聖書やキリスト教を題材としながら話したり、歌を歌ってはならないという意味ではありません。教義(ドグマ)を強制する指導が学校から追放されるべきだとなりました。子どもをキリスト教に導き覚醒させる教育は、教会およびキリスト者の親の仕事だとされます。じっさい現在のデンマークの教育法は、親が自分たちの子どもの宗教指導を免除できる、たとえ彼らが国民教会に属していても免除できるという規程を含んでいます。しかし、そうした宗教的指導免除の規程は非グルントヴィ派のキリスト者からはしばしば批判の槍玉にあがりますが。

〔未来を担う人々とともに〕

見過ごされてならないことですが、グルントヴィの教育思想には[シチズンシップという]政治的次元がありました。彼の同時代人を多かれ少なかれ支配していた思想は、次に来る世代の人間像を支配階級のイメージでかたどることが学校の目的であり、あらゆる他の種類の教育の目的であるというもの、つまり都市の上流および中流階級を特徴づける諸々の価値が下層階級に導入されるべきだというのでした。これにたいしてグルントヴィは、下層諸階級すなわち一般民衆の真の価値を対置しました。彼の意見では、未来はこれらの階級諸集団のものになるだろうということです。子どもを教えることは子どもを取り巻く世界に、つまり子どもの世界と、彼らが帰属する社会階級の世界に出発点をおくべきです。このことは、どんなに実践が困難であっても、依然として重要なヒントや直観を含んでいます。

教員養成ゼミナールを通じてデンマークの教育専門職のあいだに、グルントヴィの子どもの教育観がかなりの影響をもつようになっています。彼の教育観はデンマークの大多数の学校に例外なく普及しているのです。

三 デンマーク国民教会

[宗教の自由を求めて]

きわめて多面的な活動を展開してきたとはいえ、活動全体においてグルントヴィは自らを主として聖職者となして見なしていました。「私はだが牧師である。牧師として私のできる最善を尽くすよう求められている。」このように彼は彼の最初の政治的パンフレットに記しています。彼は、民衆の指導者であるために宗教的聖職者自身に、他の人々以上に大きな権利があるとは考えてはいなかったでしょうが、宗教的聖職者は社会的論議に参加するにあたって他の人々よりも大きな義務があるとは考えてはいたでしょう。この観点で、グルントヴィは、一八世紀末の合理主義的聖職者から受け継いだ遺産を象徴していました⁽²¹⁾。じつにそうした聖職者は多くの場合、救貧や教育、現実の農業にもかかわって彼らの教区⁽²²⁾にあって開拓者であり、先導者だったのです。

しかし、じっさいの聖職者が携わる問題にかんしては、彼は合理主義とも既存の教会ともはつきりと手を切りました。こうして他の誰にもまして、一九世紀末から二〇世紀[および二一世紀]のこれまでにわたるデンマーク国民教会にモデルを提供したのです。

デンマーク国民教会は、以前はルター派国家教会で、一五三六年に設立されました。一六六〇年の絶対王政の導入に当たって、絶対君主と緊密に連携するようになったのです。国王は原理的に変更不可の王位継承法によって、王国の住民をこの信仰の枠内で管理し、「異教徒や狂信者、冒涇者すべてから彼ら住民を保護すること」にかかわったのです。特別な王令によって様々な移民グループが彼ら自身のコミュニティーを保持することは認められはしましたが、理論的には一八四八年までこの国には宗教の自由はありませんでした。つまり、すべてのデン人人は国家教会に帰属しなければならなかったのです。多くの市民的事象にかかわって、国家教会に所属するメンバーであることが市民的諸権利を完全に行使するさいの条件でした。国家は牧師や監督に逸脱的見解をすべて抑制する権限を与えましたが、この権力は一九世紀の初頭にはたいへん抑圧的なものと見なされ、教会の公式教義にしたがう見解をもっていたであろう教会牧師と、いっそう真摯な信仰のために集会する平信徒からなる復興主義集団とのあいだに衝突が起こりました。国家教会自体から分離してはいないが、地方の牧師とは絶縁している民衆の信仰復興運動は警察や裁判所によって迫害されました。事態は[幼児洗礼を認めない]洗礼派の子どもに警察を動員して洗礼を受けさせるというようなところにまで深刻化しました。グルントヴィは、こうした迫害はまったく非キリスト的であると宣言して、これらの問題に精力的に介入しました。キリスト教は自由なしには存在し得ない、宗教の自由とは、国家教会の外部にいることも、国家教会内部であれこれの違った意見をもつことも、ともに自由なものでなければならないとしたのです。

さて、第一点目の一般的宗教自由は一八四九年の憲法体制のなかで導入されました。しかし、第二点目の問題は扱いがかなり難しいことがわかってきました。教会の公式代表者は教会における命令と規律によって確固とした立場にあったのです。

教会の公式広報官にたいするグルントヴィのある部分激しい批判は、グルントヴィをトラブルに巻き込んでいきましたが、しかし、そのことで彼は教会やキリスト教の本来的あり方にかん

して深く省察することになり、いわゆる「類まれな発見」に到達しました。この「発見」はキリスト者のコミュニティーが福音そのものよりも古いこと、教団会衆の本質をなすものが洗礼と聖餐の聖礼典での友愛の絆であり、さらに教会史の全体を通じて洗礼のなかで聞かれた使徒の告白であったことを意味します。聖書ではなく、洗礼の会合への参加を本質とする信仰が第一に教団と一緒に結び合わせるものでした。グルントヴィが諺のなかで表現したのですが、そのスローガンは「我等の主が創設したのは読書クラブではなく、教団会衆である」というものでした。

このことの帰結は、神学者たちの諸々の解釈や構築物が生けるコミュニティーに比べてたいてい重要ではないこと、生けるコミュニティーこそ硬直した権威主義的制度からの自由であり解放であると見なすことだったのです。

〔国家教会から国民教会へ〕

それゆえに、グルントヴィは住民の地方の聖職者への強制的な緊縛の廃止を望みました。したがって、住民の誰もが望むデンマーク教会の聖職者との結びつきが可能になるよう希望しました。つまり、デンマーク教会内部で自由な会衆が可能になることを望んだのです。したがって彼は聖職者の自由をも提案しました。それは個々の聖職者に拒否権を与えます、すなわち実質的に当の教団に属していないと思える人々に向けては職務遂行を辞退する権利を与えることになります。それは聖職者層にたいしてあらゆる観点で彼らの召命を遂行するさい自己の良心にしたがう機会を与える自由、これまでに比べてはるかに大きな聖職者の自由だったのです。もちろんグルントヴィは、デンマーク教会内ですべてが自由だと考えたわけではありません。むしろかなり単純に、教会は共通意見によって必要なことを決定できると考えました。さらに、たとえば一八二六年に彼自身の手になる賛美歌の利用が禁じられていたとき、彼に義務づけられた態度とはまったく正反対に、自由があるべきだとしたのでした。

組織的にいえば、グルントヴィのデンマーク教会にかんする見解は普及していきました。一八四九年の[自由主義憲法の成立]後、既成のデンマーク国家教会について語ることは意味がなくなります。この憲法体制は「デンマーク国民教会」(Den danske Folkekirke)という新しい造語を用いました。それはいかなる現実の教義的統一性も統治活動もないかたちで存立します。国家による監督の主な目的は、拡大された範囲の内部で個々の教団・会衆の自由を保障することです。諸々の教団・会衆が彼(女)ら自身の聖職者を選び、地理的に決定された教団・会衆と並んで、自発的な教団を設立ことができます。それらの教団は一定のキリスト教の見解、主にグルントヴィ派のそれによって、彼ら自身の仲間の結合関係をかたちづくることができますが、にもかかわらず、それは国民教会に属するのです。順応しやすい国民教会が自由と統一性とを結びつけ、こうして他のほとんどのプロテスタント諸国に見られるようなバラバラの宗派への分列を防いだのです。



ヴァルトウ教会で賛美歌を歌うグルントヴィ

グルントヴィは一八三九年に、「上から」の指示によってヴァルトウ教団での高齢の女性のための聖職者に任命されました。それは国民教会の枠組みの内部で、グルントヴィの賛美歌を利用したいとする人々の増加に自由に対応する余地を与えるものでした。この教会で彼には、彼自身の子もたちの堅信礼、つまり二人の息子と、娘のメタの堅信礼が認められたのです。それは、以前はコペンハーゲンの監督によって彼に禁じられていたことでした。老聖職者であり詩人のグルントヴィのここにある絵は、一八六八年にヴァルトウ教会で賛美歌を歌っているさいに描かれました。ヴァルトウは今日もなお、首都でのグルントヴィにかかわる活動の中心地として生きています。ここ[の近くの場所]には全国にあるフォルケホイスコーレが共同の情報センターと事務局が置かれているのです。

〔参加者のための喜ばしい教会〕

国民教会の一般信者の参加もまた、個々の教団の事務的運営と同様に、グルントヴィの思想の影響のもとで発展しました。宗教にかかわる聖職者であることからくる彼の責任の観念が彼をキリスト教教団の中心にいる聖職者の地位に就けませんでした。一八四三年に彼は、とりわけオックスフォード運動^[7]についての個人的印象を深めるためにイングランドを訪問したのですが、そのとき、当の運動と彼の見解との隔たりについて記録しました。彼が手紙のなかで書いていることですが、英国人たちは教会を「彼らが聖職者と認めた人々」からなるものと見なしていたのですが、これに反してグルントヴィは、教会を「信仰をもち、洗礼を受けた人々」すべてからなるものと考えたのです。グルントヴィにとって、教会とはそこに属するメンバーのことであり、聖職者のことではなかったのです。

とくにグルントヴィの思想から影響を受けた諸々の教団は密接な教団会衆の生活によって特徴づけられるかもしれませんが。それは社会生活一般に影響を及ぼすものではありませんでした。またその教団は教団に属することの喜びの経験、教団を通じて神の恩恵にともにあずかる経験によって特徴づけられます。じつにグルントヴィ派の運動はより敬虔な道德運動と対比され「喜びのキリスト教」と呼ばれてきたのです。喜びは能天気な楽天とはかかわりないと解されたのですから、そこに何か悪い問題があるというわけではありません。今日ではグルントヴィ派の運動は、デンマーク国民教会内の他の部分との違いがはっきりしなくなっています。後者は全体としてグルントヴィ派の伝統と、その教団会衆や自由にたいする見解から強い影響を受けていますし、他方で、グルントヴィの賛美歌があらゆる教会運動の聖職者によって選ばれ、歌われているのです。

四 フォルケリヘズ

[まずは人間、而してキリスト者]

ところで、キリスト教の教団会衆が抽象的な真空のなかには存在せず、その基礎を具体的な国民のなかにもっていたこと、福音のことばが民衆の言語によって発話されることは、グルントヴィーにとって決定的でした。デンマーク教会はデンマークの民衆・国民と彼らの歴史に基づいており、民衆・国民がキリスト教に出会うのは、デンマーク語を通してのことでした。民衆的デンマーク語とキリスト者とは密接な相互関係にあったのです。

こうしてグルントヴィーはキリスト教とデンマーク的なものを混ぜ合わせ、ほとんど同一のものにしてしまったと反対者は主張しました。しかし、そのことは問題はなかったでしょう。グルントヴィーがはっきりさせたのは、一方で私たちの通常の国民生活のなかに生得の権利があることばを用いなければキリスト教の神の国について語ることはできないこと、すでに民衆・国民的な同朋関係が存在するときにだけ教団会衆の同朋関係について語ることに意味があることでした。人間は必然的にキリスト者の根です。このことをグルントヴィーは諺のようにしばしば引用され、また誤解されるフレーズ、「まずは人間、而してキリスト者」(Mennesket først, og Kristen så)によって表現しました。それはキリスト者である以上に人間であることが重要だという意味ではなく、人はまず真の人間であることなくして真のキリスト者ではありえないという意味でした。グルントヴィーにとって両者が等しく必要だったのです。晩年に彼は、彼の友人たちが過剰なほど自分たちを「デンマーク的な友、つまりフォルケリな友」と「キリスト者の友」とに分け隔てるのを拒絶しました。前者の友は彼のキリスト教の見解をほんのわずかしき理解していませんでしたし、後者の友は教条主義の傾向があり、自由にかんするグルントヴィーのフォルケリな見解、すなわち民属・民衆的な見解と和解することができなかったのです。

[フォルケリヘズとは]

さて、グルントヴィーがフォルケリヘズすなわち民属・民衆性について語ったさい、彼が既にあったことばを用いたのは本当です。しかし、彼はそのことばにまったく新しい重要な意味を付与しました。そのことが現代デンマーク語の定義を困難にしています。他言語への翻訳はまったく不可能です。通常このことばは外語のテキストには翻訳されずに[デンマーク語のまま]残されています。

じっさい、フォルケリヘズということばは、当該の国民あるいは民衆を意味するフォルケット(folket)のあらゆる特徴や精神的、知的遺産を含みます。フォルケットすなわち当該の民属・民衆はすべての社会集団に共通する術語として具体的に構成されており、理想主義的あるいはロマン主義的に構成されてはいません。このことはこの概念がはっきり限定された社会集団の特殊な諸価値に強調点を置く概念構成と直接矛盾することを意味します。つまり、社会集団の特殊な諸価値に強調点を置く概念構成は、文化的ないし経済的な上層階級が過去の伝統を代表するのかそれとも下層階級がそうするのかといったように議論しますが、フォルケットの概念構成はそうしたものと矛盾するのです。グルントヴィーが生きた社会的状況にあ

っては、フョルケリなもの、民属・民衆的なものを強調することは必然的にかなり強い意味で民衆一般を強調することでなければなりませんでした。グルントヴィが考えたように民衆一般は、国際的に支配的な教育のなかで、あるいは古典に支配された教育のなかで過小評価された諸価値を保有していました。大学や読書世界は、そこに属する人々が世界文化や古典的遺産のなかで見つけ出したもの、つまり古典的に人間的なものに強調点を置いていました。これにたいしてグルントヴィは、大部分のデンマーク民衆のルーツが特殊デンマーク的な遺産にあることを指摘したのでした。

フョルケリなもの、とデンマーク的なものは一般的に認められているように同一でした。しかしながら他の民属・民衆にも彼らのフョルケリヘズ、それぞれ特殊な諸特徴を備えた民属・民衆性がありました。このことから、他の諸民属、諸国民が彼ら自身のフョルケリヘズを保護する権利に深く敬意を払う理由は、グルントヴィによっても主張されました。これと正反対なのは、諸々の少数派民属の個性を尊重しない政治的企図でした。グルントヴィはフェロー諸島⁽²³⁾やグリーンランドの住民が彼ら自身の言語を保持する権利を提唱しました。彼は二度にわたるスレースヴィ・ホルシュタイン戦争の戦間期に、ドイツ語の利用を封じ込める言語条例によってデンマーク語への同調政策を進める政府の施策に反対していました。あらゆるかたちの帝国主義が彼にとっては嫌悪すべきものだったのです。たしかに彼はこれらの二度の戦争のなかでドイツ人にたいする頑固な敵対者でした。しかし、彼はドイツ人がドイツの地にとどまるかぎり、何ら彼らに敵対するものではないと強調したのでした。ドイツの地では、ドイツのフョルケリヘズがあり、デンマークの地にはデンマークのフョルケリヘズが同等の権利で備わるとしたのでした。

ある種のことば遊びになりますが、グルントヴィは「フォルケ・リヘズ」(folke-lighed)ということば(文字通りに解すると「民属・民衆の対等平等性」ということば)を使ったのです。こうした議論の効果によってフョルケリヘズが意味する「対等平等性の謎」を解くことができるのです。要するに、フョルケリヘズの尊重とかそれへの敬意とは社会的平等への前進を意味したのでした。同時に、フョルケリヘズは自由と密接に結びついていました。そのことが友愛(兄弟姉妹愛)のもうひとつの道だったのです。こうしてフランス革命の自由・平等・友愛の三つ揃いの形式はグルントヴィの観念ではフョルケリヘズ、つまり民属・民衆性の思想のなかに含まれているのです。

[民衆的自由と女性の権利の擁護者として]

こうしたことはすべて、グルントヴィの政治的活動のみならず、フョルケリヘズが前提であり目的でもある彼の教育思想へと結実していきました。生のあらゆる分野における自由をめざすグルントヴィの継続的なキャンペーンは基本的でした。なぜなら、人間の生は、それが自由に生きられていることにおいてのみ価値があるだろうからです。しかし、彼のキャンペーンは、とくに最貧層で、その当時の経済的社会的特権によって服従を強いられた社会階集団、あるいは何ら特権をもたない社会集団の自由を打ち立てるといっははっきりした目的をもっていました。それゆえに政治的にも教会の問題にかんしても、彼は左派の立場にいたのでした。じっさ

い、しばしば起こったことですが、彼はラディカルに左派的であり、誰も彼について行けないようなこともあったほどです。彼が私たちの時代のカール・マルクスや毛沢東と比べられる事実があったとしても驚くことはありません。ですが、後者の二人は社会へのアプローチにおいてグルントヴィとはまったく違っていました。グルントヴィの精神的次元、キリスト教的次元はまったく彼自身に固有のものだったのです。

最後にとくにふれたいのは、グルントヴィは女性の権利の暖かい擁護者だったことです。彼は男性に話しかけ、また話し合うのと同じように、おそらくはそれ以上に、女性と語り合い話しかけることに喜びを感じていました。グルントヴィは女性たちが知的問題や公的議論を男性と共有することが絶対に必要だと見なしたのです。

女性のための平等な知的権利を要求する最初のデンマーク語の書物は一八五一年に出版されました。匿名で書かれた書簡形式の小説で『クララ・ラファエル』というタイトルだったのですが、それが新聞紙上で論争となりました。グルントヴィはただひとり男性批評家として賛意を表明し、この本の出版にたいする無類の喜びを表明しました。彼は公然と「その[著者である]デンマーク女性に絶対的に魅了された」といい、未知の著者のように、「男であれ、女であれ人間は真理に驕尾するよう神の似姿で創造され、天にます我等の主といっそうよく同意するよう、地上で人間相互に理解しあうよう創造されていることを理解している。」「最悪でも女性は大抵の退屈な男たちのようにならないだろう」と主張したのです。

この数年後、彼は議会の議員となることができ、慎ましい程度の改革ですが、社会と家族のなかでの女性の従属的地位を廃止する最初の法の議会通過を支援しました。そのときグルントヴィは当の改革をきわめて熱烈に歓迎したのです。

【おわりに】

コペンハーゲンの北の郊外の丘の上に、宗教改革以降にデンマークで建立されたもので、おそらくデンマークで最も優美な教会が一九二〇年から一九四〇年の期間に建設されました。グルントヴィ記念教会です。その資金はデンマークの公衆と国家とが折半で調達しました。それは煉瓦造りの現代的で調和的な建物ですが、そのモチーフは中世の教会建築の伝統からひかれています。それは象徴的に祖先の教会と現代の教会とを結びつけているのです。そのことはグルントヴィが彼自身のパーソナリティーと著作によって過去を現在と結びつけたのと同様です。当の教会は偉大な表現形式によって、誰も理解できなかった偉人を記念するものとして建立されています。しかしそれは大聖堂でも博物館でもなく、日常的に教区の教会として、グルントヴィの精神による生ける教会を代表するコペンハーゲンの教団会衆のひとつの家として利用されています。日曜ごとの集会でグルントヴィの賛美歌がオルガンから鳴り響いていますが、そのことはデンマーク国民教会すべてが行っていることとなんら変わりはないのです。

しかし、グルントヴィの遺産はおそらく、記念物のどんなかたちによっても可視化できない領域にいっそう生きいきと示されています。彼の自由にたいする不屈の主張は時代のあらゆる

分野で、あらゆる政党の政治家に受け継がれました。国民全体の手によるアプローチによって社会問題に対処するという思想を残したのです。その結果、デンマークはあらゆる種類の禁止や制限にたいして最も嫌悪が表明される世界の一国になっています。しかしながら、このことがすべてグルントヴィの個人的達成の結果であるのかどうか、[現在において]ほとんど彼が望んだ範囲にまで具体化されたフオルケリヘズの結果であるのかどうか、それはわかりません。とはいえ、グルントヴィがいなければ、今日のデンマーク社会が違ったものになっていたことは疑いのないところでしょう。



グルントヴィ記念教会

デンマークの田舎の教会が大聖堂に変わったかのように、グルントヴィ教会の諸々の塔は[他の教会の]尖塔とともにコペンハーゲンに聳えています。大々的に記念すべき価値のあるこの教会の礎は一九二一年(のグルントヴィの誕生日)に置かれました。しかし、当の教会の聖別は一九四〇年まで、つまりそれを建築したP・V・イェンセン・クリントの死の十年後の九月八日までできませんでした。塔はふっくらとしたパイプのような面持ちをし、巨大なオルガンのような特徴のあるかたちをしています。賛美歌作家グルントヴィの記憶にたいする特別の敬意が表現されているといえるでしょう。

原注

- [一]一七四九年に創刊されたデンマークで最古の新聞“Berlingske Tidende”のこと。
- [二]ヨーロッパでの戦争は中立勢力の国際貿易の拡大に絶好の機会を与えた。イギリスの力による貿易コントロールに抗するために、デンマークはロシアやスウェーデン、プロシアとともに軍事的中立連盟に加わっていた。デンマークの軍艦の大部分が冬の期間に機能停止状態におかれていたさなかに、イギリスは大規模な艦隊をバルト海に緊急派遣した。一八〇一年四月二日の洗足式の木曜の戦闘でコペンハーゲンに機能停止に陥り、イギリス海軍のネルソン提督はデンマーク海軍を無力状態に追い込む大戦果をあげた。コペンハーゲン港に停泊していたデンマーク＝ノルウェーの多くの商船はイギリスに没収され、デンマークは中立連盟からの脱退を余儀なくされた。そうした仕方で、それらの船は再び世界の海を航海できたのであった。
- [三]一八〇一年のコペンハーゲンの戦闘以降も商業的繁栄期は継続したが、その中立性はしだいに不安定なものとなった。しかし、一八〇七年にデンマークはイギリスとフランスの戦闘に本格的に巻き込まれ、国と首都とがいっそう不幸な事態に見舞われた。デンマークはナポレオンの側にくみしていたわけではなかったが、イギリスは、ネルソン提督が「小さな国にしては巨大すぎる」と評したデンマーク艦隊がナポレオンの大陸封鎖のなかでイギリスに対抗して利用されることを恐れたのであろう。イギリスはコペンハーゲンを包囲し四日にわたる砲撃で首都の住民と司令部に投降をするよう脅迫した。港に集結していた全海軍と巨大な商業艦隊は奪い去られ、建設中のあらゆる艦船が破壊され、艦隊が利用していた事務所のどの部署も粉碎された。こうしてデンマークはナポレオンの同盟者になることを余儀なくされ、イギリスにたいする破滅的な戦争を誓った。その結果、イギリスはデンマークの海事貿易を破壊し、ノルウェーとの連合を断ち切ったのである。戦争とともにインフレーションが襲い、一八一三年には国家的な破綻にいたった。一八一四年のキールでの講和条約で、デンマーク国王はノルウェーをスウェーデン国王に割譲しなければならなかったが、その一方で、古くからノルウェーの国王を戴いた地域、すなわちフェロー諸島とアイスランド、グリーンランドはデンマークが保持し続けることになった。
- [四]北欧神話における「ノルンたち」とは、人間の運命を司る幸運の女神たちのことであり、ギリシア神話のモイラ、ローマ神話のパルサエに当たる。アース神族は北欧神話の神の地位にある者たちのことで、オーディン(ゲルマン神話のボータン)が最高神に当たる。
- [五]スノッリ(Snorre, 1178-1241)はアイスランドの首長であり、吟唱詩人。サクソー(Saxo, c.1150-1220)はデンマークの年代記作家であり、コペンハーゲンを創設したアブサロン大司教の秘書。なお後者は全一六巻の年代記『デンマーク人の事績』(Gesta Danorum)において能弁で流麗なシルヴァー・エイジのラテン語を用いたために、グラマティクス(言語学者)と呼ばれた。『ベオーウルフ』はおよそ七世紀のイングランドで編まれた英雄詩で、三百年後に書物として書き下された。
- [六]第一次スレースヴィ・ホルシュタイン戦争は、プロイセンが親ドイツ系住民の擁護のために介入してユラン半島を侵略したとき、内戦から国際紛争へと展開した。ロシアをはじめとした列強の支援のおかげで、プロイセン軍は撤収せざるをえなかったが、しかしデンマーク政府は、デンマークとシュレースヴィおよびホルシュタインの互恵的地位を変更するつも

りはないと諸列強に約束しなければならなかった。デンマークの自由主義政府は極限的にまで発展を脅かされる問題にたいして、国内および国際問題をデンマークとスレースヴィの共同憲法体制の採択によって解決しようと試みのたが、その一八六四年に、ドイツ連邦が宣戦布告を行った。デンマークは単独でビスマルクのプロイセンとオーストリアの連合軍に対抗し完敗した。講和条約でデンマークは連合王国のドイツ語圏を失っただけでなく、およそ20万人の親デンマーク住民とともにスレースヴィの全体も失ったのである。

[七]強力な宗教的復興運動が一八三三年にオックスフォード大学のサークルから生まれ、それが部分的に家父長的研究(教会の父親たちと彼らの生涯、教義の研究)に影響を受けながら高教会運動に発展した。ジョン・ヘンリー・ニューマンは聖職性と sacrament に強調点を置くことで運動をカトリック的方向に導いた。彼自身はこの運動を原始教会との直接的関係を要請するアングロ・カトリックと呼ぶことになる。一八四五年にはニューマンと多くの運動に参加した他の牧師がローマ・カトリック教会に改宗した。その運動は広がり続け、催しや祭服の着装とともにローマ教会と密接に結びついた禁欲的、献身的実践をとめないながら、国教会の儀式に重要な意味をもつようになった。運動の穏健派(「自由主義カトリック」)はこのような極端を避けようとしたのではあるが。

訳注

- (1)この記述は、欧米諸国で一九六〇年代末より活発に起こった若者の社会運動、いわゆる「若者反乱」の時代の影響を背景にしている。
- (2)ここで「デンマーク領ギニア」は、デンマークがおおよそ一六七〇年から一八〇二年までの絶対王政時代に行っていたアフリカのゴールドコーストでの奴隷貿易基地を指す。ちなみに、デンマークは一八〇三年に帝国主義諸国のなかではじめて、奴隷貿易を法令で禁じ、一八四八年に奴隷制そのものを禁じた。
- (3)シェラン島の南にある島。
- (4)エーレンシュレイアー(Adam Oehlenschläger, 1779-1815)はデンマークの黄金期といわれる一九世紀前半に活躍した最も著名な詩人であり劇作家。シュテフェンスのドイツロマン主義に影響を受けながら、北欧神話に題材をとった詩や劇を創作したことで知られる。
- (5)シュテフェンス(Henrik Steffens, 1773-1845)はグルントヴィの母の妹。スザンナ・クリスチーナの息子。イエナ大学で哲学者シェリングに師事して以来の熱心な弟子で、コペンハーゲンでの連続講義でデンマークの思想界にロマン主義哲学をもたらすことで大きな影響を与えた。後にハレ、ブレスラウ、ベルリンの大学で教授を務めた。
- (6)ウィレメース(Peter Willemeos, 1783-1808)はフン島生まれの軍人。ランゲラン島のエーリュッケでグルントヴィと出会い、知己の仲になるが、一八〇八年に英海軍との戦いで戦死した。
- (7)アンスガー(Ansgar, 801-865)はハンプルク・ブレーメンの大司教。キリスト教をデンマークやスウェーデンに布教することを試み、「北方の使徒」といわれた。
- (8)一八三〇年の七月革命はフランスで一八一五年以来復活していた王政を再び打倒した

- 市民革命のことであり、その波は他のヨーロッパ諸国にも波及した。
- (9) フランスの二月革命とは一八四八年の二月に起こった革命で、翌月の三月にはヨーロッパ各地に伝播し、ヴィーン体制の解体につながった。なお、この年にフランスでは立憲君主制が廃止され、第二共和政が樹立される。
- (10) リンカーン (Abraham Lincoln, 1809-1865) はアメリカの第一六代大統領となった政治家。彼は一八六三年にペンシルバニア州のゲッテスバーグで「人民の人民による人民のための統治」という民主主義の本質を要約する有名な演説を行った。
- (11) ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) はヴィクトリア朝時代のイギリスの小説家。主に下層階級を主人公にして弱者の立場から社会を風刺した作品を残した。主な作品に『オリバー・ツイスト』、『クリスマス・キャロル』、『二都物語』などがある。
- (12) エドムント (Sir Edmund William Gosse, 1849-1928) は英国の詩人であり作家、批評家。
- (13) ドルイド僧はケルト人の社会の祭司のこと。なお「モナ」はローマ人にとってはケルト人とその祭司の島だった。
- (14) ディズレーリ (Benjamin Disraeli, 1804-1881) はイギリスの保守政治家であり、二度にわたって首相を務めました。
- (15) ヴェゲナー (Johan Wegner, 1811-83) はレディン・フォルケホイスコーレの最初の校長を務めた。
- (16) スクレザー (Ludvig Schrøder, 1836-1908) はデンマークのホイスコーレ人。レディン・フォルケホイスコーレの校長を務め、対独敗戦を契機に学校がアスコーへと移転した際にリーダーシップをとった。
- (17) この点は、グルントヴィ『ホイスコーレ(上)』所収の「異文」のうち「[若者との試験談義]」を参照。
- (18) カール・ニールセン (Carl Nielsen, 1852-1927)、トーマス・ラオブ (Thomas Laub, 1852-1927) はともにデンマークの有名な作曲家。
- (19) 一九四六年に神学者であり、民主主義思想家のハル・コック (Hal Koch, 1904-63) は、シェラン島北部のクロレルuppにグルントヴィのオリジナル構想に近い「市民学校」としてのホイスコーレを開校した。コック『グルントヴィ』所収の「コックのグルントヴィ論」を参照。
- (20) 二〇一四年時点ではおよそ七〇校となっている。
- (21) 一八世紀の合理主義聖職者のなかには、たんに宗教的儀式を執り行うだけでなく、ジャガイモの栽培法やワクチン注射の普及など、民衆の生活に献身する博愛主義的活動を行った者もいた。コック『グルントヴィ』を参照。
- (22) 教区とは農村部での教会を中心とするコミュニティ。
- (23) フェロー諸島はスコットランドとノルウェー、アイスランドの間にある北大西洋上の諸島。デンマーク自治領で、面積は一三九八・八五平方キロメートル、人口は約四万八〇〇〇人になる。

【補録】

生のための学校

N・F・S・グルントヴィ

ダネボはまだ眠ったままなのだ—— チュラの歌⁽¹⁾

【死せる学校】

遺憾ながら、我々は死のための学校を知りすぎるほどよく知っている。そうだ、それを知っているだけではない。「死せる言語」に依拠することでその名誉を保っている学校では、文法的完璧さや語彙目録の完全さが、生を費やし、生の犠牲を通じて当の学校が近づこうと努力する理想であると我々は認める。そうだ、死のための学校は我が国にあっては民衆全体が周知しているものなのである。というのも、諸々の文字にはじまり、文献情報に終わるのがどれにとっても例外ない事項であり、そのことは大なり小なり幾世紀の歳月を通じて学校と呼ばれてきたものすべてに、今また学校と呼ばれているものすべてに当てはまるからである。すなわちすべての文字は、それらが天使の指と星々のペンで書かれていようと死せるものである。読者にあって対応している生に溶け込むことのないすべて文献情報の潜在力は死んでいる。数学や文法が消耗で退屈なだけではない。脳がその他の身体とともに正しく発達した状態になるまでの幼児期、[人]生が内面においても外面においても、我々になじみのものとなり、我々が生を書物のなかに再発見し、生の諸条件について啓蒙されることにたいして自然な喜びを感じるようになる以前の幼児期においては、人間のための意義深い主要問題の全体が消耗であり、退屈なのである。

それゆえ、老人のこぼれや沈黙、熟慮や知恵を子どもたちに印象づけようとするさい、我々は子どもたちに、心身の両面にわたって老人の弱さのなかにある死を植えつけてしまう。我々のたくさんの子どもたちの生の力をも無力化してしまう。したがって、半ば成長した男子がまったく影のように時を過ごすのであり、我々は彼らのすべてから人間性を、つまり人間の自然本性を取り除こうと努力する、自然本性の法則を拒むことで取り除こうと努力する。だから[半ば成長した男子にあって]動物的生が勝利するとしても、通常は若さの力をもつ人間の生は、我が国では不自然な年寄りとしての生であるにすぎない。すなわち日記に動物性の軛にたいする日々の隷属について書き記し、そのことに偏見をもつことができる生にすぎない。このことは私の勝手な思い込みではないし、さらにいえば、とくにイングランドやアメリカの専門的で人間愛溢れる医師たちの悲痛のコメントであるだけでもない。日々の経験や新時代の歴史の一頁一頁が、眼を見開いた人間それぞれに開示し証し立てるまったくの真実でもある。未成年男子の学問にたいする我が国のこうした学校狂騒、より正しくは地下の神々にたいする我が国の学校狂騒が結果的にもたらすにちがいない根本欠陥は、イングランドの医師たちが正しく述べているように、想像されるところの矛盾、魂と身体のあいだにある矛盾である、すなわち身体を欠く者が魂を獲得しなければならないということである。この矛盾はそこから導き

出される結果と同様に、キリスト教の精神に内在するものではないが、その精神の文字やその精神の影が魂と身体との両方を神聖化することに役立つことは否定できない。なぜなら、学校が我々を墓のなかにおき、あるいは我々の健全な人間性を包み込み、我々の生の力を消耗させるさい、我々の祖先は明らかに[魂を別格に扱い、]殺されたのは身体にすぎないということ、つまり我々の腐敗した自然、酷使される自然にすぎないということで慰められる。我々が最良の人々とともに我々の書物⁽²⁾と聖書のことばを学ぶだけで、我々は永遠の生についての手紙を得るだろうということで慰められるからである。それはすなわち、世俗的な死が我々を永遠の生から切り離すことではまったくなく、むしろ永遠の生への唯一の道であり、望ましい移行であると教えるような手紙なのである。

[健全な知性の国、デンマーク]

ところで、このキリスト教の輝きにたいする迷信はたしかに、我々の時代にあつては多くの人々を圧迫したり、慰めたりするようには働いていない。しかし、父祖たちがとくに、諸々の書物から学び、子どもたちに課すことのできる質のキリスト教に背負わせた課題は、今では通常は書物の知識や機械的反省の全体に負わせることができる。だからそれらは魂にとって永遠に有益であるはずだとされる。世俗的な魂と身体の両方にとっても、人間の生が習得する技能にとっても、さらに我々の現世的福祉や快活さ、健全な知性が神意と我々の自然本性とを通じて明白に依存している活動の全体にとっても、文献の知識や機械的反省が無益であり有害でさえあるとしても、それらは、魂のためには永遠の利益であるはずだとされるのである。

たしかに今、[文献の知識や機械的反省による]死へのこのような不自然な傾倒が支配するときに、生をはっきりと擁護し、あるいは学校の諸々の死せる罪惡を列挙することは有益ではない。しかし、自然の力によるか特別に好都合な諸条件によって、病気を耐え抜く人間的生命力を維持した我々は、学校がどのように我々の栄えある人間性の最後の残滓を取去るように働きかけるのか、それゆえ、どのようにすべての教養ある民衆、教養ある人々が彼ら自身に備わる動物性の奴隷となり、彼らの外部にある野蛮さの奴隷となるかを知るのである。だが、我々にはそのことを証明し、忠告し、警鐘を鳴らすことしかできない。まず通じる範囲では実例をもとにした口承伝達によって、次にペンによってそのことを証明し、忠告し、警告することしかできない。たとえ子どもの生を犠牲にするような諸々の文字、人々が永遠という果実を期待するところの諸々の文字がどれほど死せるもので、力のないものであるかを証示するだけでも、証明と忠告、警告しかできないのである。ただ肝心なことは、外面的にそう見られるように[そうした課題が]ほぼ絶望的というものでもないことである。とりわけ、いわゆる「教養のある世界」が基本的に、外見よりもはるかに自然で、お互いに旧知の仲であろうとするデンマークにおいては、絶望的ということでもないことだ。この国では何がしかの人々がじっさいに、教養形成と書物の芸術のために殉じたり、そのために自分の子どもたちの死を願うなどということはまったくまれなことであろう。それゆえ、少なくとも我が国では死への苛立ちと生への関心のために話したり書いたりすることはきっと十分な賛同を得ることだろうし、そうした意見の本質が理解されればただちに、いわば満場の拍手喝采が得られることだろう。そのことが大仕事だということは驚くには及ばない。なぜなら、話したり書いたりする我々と聞いたり読んだりする人々との両方が大いに快活さを欠いた人々、母語をぞんざいに扱う人々であるのは、まさしく死せる学校制度の弊害にかんする我々の主張によって明らかのように、我々が正しい

からである。

我々には生のための学校が欠けており、そうした学校が緊急に必要であること、最近では新たにまた、ロスキレとヴィボーの民衆評議会の喧騒に教えられたこと⁽³⁾、こうした感情は、デンマークではまったく一般的であるにちがいない。だから、この事情を度外視して多くの学校が死のために要請されるとすれば、それが端的に間違っているのは明白であり、その誤りは一方で、[生のための]学校の不在の前提となっている生にたいする澄んだ眼の欠如から、他方ではデンマーク的素朴さから簡単に説明できるのである。ちなみに、後者のデンマーク的素朴さは、ラテン語学校のように「死との協定」の告白から離れて、学校が大胆に「生の狭い道⁽⁴⁾」をめざすときには、これまでのように生をつねに信仰箇条と見なしてしまうであろう。

したがって、我々が学校におけるこの「生の問題」を自然かつ明快に、率直かつ元気に話したり書いたりすることを学べる度合いに応じて、デンマーク語による生ける陶冶形成は、すなわち我々がこのように意気軒昂にラテン語学校、すなわち死せる学校を解体するであろう陶冶形成は理解され、その真価が認められるだろう。この問題に絶望という外見を与えるのは明らかに、ある面ではベテランと若手、大物と小物を問わず大多数のラテン語派に宿る上品を気取った野心であり、ある面ではデンマーク人が本性的に論理に弱いことであるが、[それは外見にすぎない]。というのも、上品を気取った野心は、学校通いが啓蒙のための闘争の歩みではなく、生からの退歩にすぎないという思想によって反逆を受けるからであり、[デンマーク人の]論理の弱さにたいしてはきわめて強い異論があり、その点での日常の経験もあるのだが、ともあれ論理の弱さは文法あるいは数学が万能薬であり、それによって我々には理解できない仕方であるとしても、長い時間をかけて癒され[弱さが克服されて]、健康を回復することが容易に想像できるからである。たしかに、人間の自然本性や民衆の生、母語といったものが、それらの諸問題をこのように[外見的に]仕立てられ(構成され)た正しさによって克服できるはずだと考えるのもまた、じっさいには馬鹿げている。だが、その外見は人を欺く。まさにデンマークにおいて、ある場合は悲しみのために、ある場合は喜びのために欺くのであり、だから、まさに我々がここで対立の外見の相のもとで多くのよいことがらを見つけたように、我々はまた自然や生、母語にくみする力強い語り部を見つけ出すだろう、たとえすべての語り部が女性服を装っていようと⁽⁵⁾、そうするであろう。

[デーンの女たちとともに]

そうである。この点ではたしかに、我々はデーシンの女性⁽⁶⁾と彼女らの娘たちが、すぐに我々の話を理解するために学ぶだろうと考えている。我々があらゆる状況のもとで、とくに「日常生活」のために、生の決定的な長所について、すなわち決然として力強い活動と母語の決定的な長所について、やや情緒的で不器用な仕方ではしゃべり、それを数学や文法にも、代数学や文字配列にも優先させ、あらゆる種類のスコラ的なもの⁽⁷⁾に優先させるとしても、デーシンの女たちと彼女らの娘たちは、すぐに我々を理解しようと学ぶだろう。そう考えられる。我々がデンマークで女性を獲得したなら、我々は王国の不滅の女王を得たのであり、彼女を国王は何もかも冷酷に拒否するようなことはけっしてない⁽⁸⁾。そうだ、我々がデンマークの心を得たならば、その頭はけっして冷酷に心と離別することはない。すなわちその頭は、デンマークでは深く自然な根柢をもっているのだから、多かれ少なかれどこでも有効に働いており、他の国に

はないほど徹底した仕方で有益に働いている。この国では、どんなふうに男性が好ましい状態にあるかを、他ならぬ彼の妻が確信している。我々の国には、美しい少女に、すべての死せる言語にたいして自らの母語をはるかに高く掲げる術を簡単に教えられない老校長はいないし、ましてやそのような若い教師はいない。この国でたんに必要とされるのは、女性が現実の道理をよく理解することである。すなわち、彼女が自分の言語や、啓蒙および陶冶形成のすべてを、数学やラテン語文法抜きに習得しても、それは古い制度にしたがえば、粗野であり野蛮だとされたにちがいないのだが、それゆえにこそ、古い制度は自ずと廃止されるのだということを理解することが必要である。この[古い偏見が反駁される]事態を私は自分の目の前で見ています。つまり、私の執筆制限⁽⁹⁾と、そのことから結果している可能性があり、おそらく結果しているであろうが、私は感情的にものごとを記述しているにもかかわらず、私の妻は私の書斎を掃除し、窓をきれいにし洗い流し、そのことで私がいつものように感謝のキスをするよう仕向けてくる。そのたびに[私は女性への古い偏見が反駁されている]事態を見ているのだ。こんなふうで私はやれやれと耳の後ろを掻きながら、書斎がいつそう明るく、きれいになったことを否定できない。取り除いてもいい小さなことがらは、以前は塵と紙屑の山に埋もれて見えない状態にあったが、[掃除によって]すべてがいつも簡単に見つけられることは否定できない。というのも、このようにして書斎で窓を拭き、きれいに洗い流す勇気がデーンの女たちにあるので、[書斎そのものと同様に]デーンの男たちの脳裏の書斎もすっきりした具合になるからである。

しかし、[ここで問いかけがなされる。]美しく、愛するに価し、魅力があり、男どもの扱いがたいへん上手ではあるが、しかしまったく非文法的かつ非数学的、非科学的で、それゆえ基本的に精神を欠き非理性的で野蛮な性にたいして、彼女らがもつ[精神的]諸力を知るよう教えることは一種の国による背信ではないのか、あるいは、これまで彼女らがまったく謙虚であり、男たちの手に運営を委ねていた学校問題で、彼女らの[精神的]諸力を利用することは⁽¹⁰⁾、一種の国による背信ではないのか。我々が暴君と呼ぶものを倒すために同盟するのは、やみくもの物理力ではないのか。その力がやみくものに働いて悪い状態をいつそう悪くし、我々をまっしぐらに野蛮状態に投げ返ささないよう防御する最小限の害もないのだとすれば、それはまさしく最も強く、最も危険で、最も不安を呼び覚ます力ではないのか。[こうした問いかけが。]

このことにたいして、我々がここで語っている美しい性がデーンの女たちやその本当の娘たちであるのだから、あるいは私がちよつとした歴史家でもある北欧の吟唱詩人であるのだから、私には我々が何と答えることができ、また何と答えようとするのかはよくわかっている。今、私は問題を自分のこととして語っている。というのも、私もデンマークの真摯な詩人たちも、デーンの女たちやその娘たちに感謝しなければならないからである。すなわち[デーンの女たちが精神諸力を発揮する人々であるなら、]我々は読者を探しに、移民して北アメリカ人になるには及ばないことに感謝しなければならないからである⁽¹¹⁾。歴史家として私は、美しい性の一部の者が、精神を傷つけ、生を傷つけるような仕方で自らの優位性を誤用するとしても、そうした者は私と連携しようとする者ではないし、私の自然な女友だちでも、母語の女友達でもなく、有益な活動の女友達でもないとはあえて主張する。まさにその正反対である。デーンの女たちは、王国をすべての野蛮な者どもから守った英雄たち、各国で民属精神の生まれ

つきの使徒である吟唱詩人たち、偉業を物語る諸々の記念碑を建てたサガ語りの人々⁽¹²⁾をも産んだのであり、彼女の娘たちはこれらの人々を花輪で飾ったのである。

結局、ここから次のことが帰結する。すなわち、私が美しい性である女性の援助が必要だと感じるのは、自然とも民属の生活とも、母語とも闘争する学校に抵抗する適切な根拠が欠けているからではない。むしろ、たんに不自然や本の虫的な制度、死せる言語への非合理的な偏愛があらゆる理性的議論を拒むからであり、それらのものはたんに別のより強い自然な愛、生を書物より高く掲げ、母語に溶け合うものへの愛によって克服できるだけだからである。ただ私がデーンの女たちとその娘たちとの絆を保持するためにだけ、その絆の無垢を示し、晴れて勝利者が必ず得るにちがいない喜ばしい諸結果を示すためにだけ、ただそのためにだけ、私は民属・民衆的で市民的なホイスコーレの必要性を今示そうとするのであり、既存の状況のもとでの理性的議論の働きにたいする信頼から、ホイスコーレの必要性を示そうするのではない。こうして、民属・民衆的で市民的なホイスコーレは、デーンの女たちを排除して彼女たちの最深の感情を傷つけることはまったくなく、むしろ彼女たちの頭と心にしたがって存立するであろう。

[生のための学校がめざすもの]

さて、私のここでの第一義的な努力目標は、生のための学校によって私が理解していることをできるだけ明快に語ることである。というのも私は、残念ながらまだそのように理念的で机上にあるだけの学校組織にたいして、大多数の人々がまったく曖昧でまったく間違ったイメージを思い描いていると気づいたからである。だから、規則が命じられ、教え込まれるのは書物を用いる実験室でなければならず、そのことによって生が矯正改良され、基本的にすっかり創り直されると考えている。もちろん、その出発点は[生の]解体であり、したがって死なのである。生は生きることによって先立って解明されうるし、解明されるべしとし、学者の頭にしたがって創り直せるし、そうすべしとするのはまさしくドイツの構想であるが⁽¹³⁾、この構想はそれに基づくすべての学校を解体と死の仕事場にすることにちがいない。[本の]虫たちが気前よく生を浪費する仕事場に変えるにちがいない。こうした構想を私は完全に破棄した。学校がじつさいに生に恵みをもたらす啓蒙の施設となるには、第一に、学校は啓蒙を[自己]目的としてはならない、あるいは学校それ自体を目的としてはならない。むしろ生の関心を学校の目的としなければならない。第二に、学校は現存する生を取り上げ、その有益さを啓蒙し、促進するようにのみ努めねばならない。このように私は主張したのである。なぜなら、どんな学校も新たな生を我々の内部に創造できないのであり、それゆえに、古い生を取り除いてはならない、あるいは、我々がそれを保持すれば別のよりよい生活が結果として得られると思われるような諸規則、そうした諸規則の開発に時間を費やしてはならないからである。

ところで、人間の生はまったく多様であり、三つの主な方向へと分類される。すなわち、神学的生、市民的生、そして学問的生の三つであり、それゆえにまたこれらの三種類の生のための学校が考えられる。すなわち、教会学校、市民学校、そして学術探求の学校であって⁽¹⁴⁾、それらにはもちろん、対応する生と同様の差異がなければならない。しかし、ロスキレとヴィボー⁽¹⁵⁾に欠如していたのは市民学校だけだったので、私がここで立ち止まって考察するのもその学校である。それは、我々全員が共にできる唯一の学校であるのだが、そんなふうに考察

できればいっそうよい。すなわち、我々全員がデンマークの市民、啓蒙された有能な市民であることができるし、そうあるべきである。しかし、明らかに教授であり学者であることは、ごくわずかな人々だけに可能であり、可能であるべきである。そして、教会学校が神的、キリスト的生を、その生が欠如した場に創造できないとするなら、我々には教会も教会学校もすでにたくさんあり十分であると必ずわかるにちがいない。つまり、キリスト的生が欠如しているところでは、その生のための啓蒙はまったく余計なものだからである。

最後に我が国には聖職者や教授を育成するための施設があるが、それは少なすぎるというよりもむしろ多すぎ、小さすぎるというよりは大きすぎる。他方で我が国にはデンマーク市民を陶冶形成し、育成する施設がない。ちなみに、我が国のすべての学校施設が優れたものであり、適切なものであったにしても、我々すべてが参加できるし、参加すべき民属・民衆の生、および市民の生、さらに我々が我々の生きいきとした営為の根であり源泉である民属・民衆の生および市民の生、そうした生のためのホイスコーレを考えるかぎり、それら[すべての学校施設]はまったく欠陥の多いものであった。こうした生が軽視され看過されるなら、[民属・民衆的および市民的啓蒙以外の]すべての他の啓蒙はそれ自体で死んだものになり、まさに民属・民衆にとって致命的でありデンマーク王国にとって有害なのである。

たしかに私は、この[民衆的市民的な]生が学者・教養層にあってはたいなる異端であることを知っている。というのも、よきラテン語派学者になろうとするなら、とりわけデンマーク的学芸やデンマーク研究の全体は警戒を要するし、古代の遺産を住处としてそこに留まろうとするなら、つねにデンマークの野蛮から「古典的土壌」へと移行すべきであると、ラテン語派学者たちは必ず主張するからである。他方、数学者たちは基本的に生にも死にも、人間的な事業に類することにも注意を払わないだろうし、数学の応用においてさえ過度に普遍的、世界市民的である。数学者たちは純粋探求と応用との両方に、最高度の洗練と最高度に自由な活動空間を見つけることがなければ、数学の応用が何がしかの言語に制約されることはありえないし、個々の民属・民衆の関心ないし国の関心や最善、福祉にたいして秀逸な視点を採ることもありえない。

ところで、私の学問的異端は、およそ[市民的生と学問的関心の]両極の信条からはるかに距離を置いており、全体的で大きな人間の生、人類の生を含むものであるが、その生は諸民属の生の対象および個人の生の対象を排除せず、それらを真の生ける学問全体の対象として含んでいる。そうした私の学問的異端を否定はしないが、ここでは私はつとめてあらゆる学術的論争を回避するつもりであり、たんに私の通常の市民的立場からのみ、博学な人々が国と民衆にまったくひどいやり方で仕えている点に注意を促すつもりである。そうした博学な人々は母語にたいして身を守り、一事が万事、計測や数字に専念しようとする[数学的自然科学に携わる]人々に比べて必ずしもましというわけではない。だからそれらの人々は、新たな南ウェールズに「学者の共和国」を設立したとするなら⁽¹⁶⁾、すべての国々に最高の仕方で仕えたことであろう。あるいは彼らは、どこか十分な空間が得られるところで、ラテン語を母語にするか普遍言語⁽¹⁷⁾を創造したことであろう。そのさい彼らは航海の機会とともに世界じゅうに彼らが教育的に仕上げたものを普及したであろう。それがラテン語文法であろうが純粋数学であろうが、その中間あたりのものであろうが、彼らの流儀の教育を普及したであろう。そうしたことで最高の仕方で、あらゆる国々に仕えたことであろう。

この[私の示唆による]助言はたしかに、ずっと前に博学の人々にたいしてなされていてよ

かったのかもしれない。死せる言語が、とくにそのなかでラテン語文法がたんに基本的学術の源泉であるだけでなく、すべての国家の官吏に望まれねばならない陶冶形成、聖職者や裁判官等々によっても要求される陶冶形成でもなければならぬという意見を人々がもちあわせていなかったとすれば、ずっと以前に積極的に先の助言を行なったであろう。付言すれば、数学は市民的職業全体を改良し、高貴にする諸々の奇跡を起こすことができるし、他方で数学はそれに付随して、可能なことがらすべてを解明する知性を研ぎ澄ますことができるという予感を人々が得ていることもたしかなのである。

〔民衆、市民のための官吏をめざして〕

さて、こうしたことをできるだけ単純明快に取りあげるために、私はデンマークの聖職者や裁判官等々が、彼らの仲間のなかで有能な官吏になるために幼年期から必ずラテン語文法と格闘し、たくさんのラテン語作文をこなしていなければならないのかどうか、そのことに何の価値があるのかを考察しよう。さらに大学では、数学や天文学、物理学、実践哲学および思弁哲学の教科書の学習に先立って、ここでは新約聖書のラテン語訳を、かしこではローマ法のデンマークの状況への適応やデンマーク法のラテン語訳⁽¹⁸⁾をさらに学ばねばならないのかどうか、このことに何の価値があるのかを考察しよう。なぜなら、私のペンがこのような根深い偏見のなかに投げ入れられ、そこに埋没している状況ではよいことがらは何も得られないからである。これに反して、私が自らの確信として認めることだが、すべての未成年男子の学問がナンセンスであり、本の虫としてのあり様や民衆からの乖離、母語の無視、すべての民属・民衆や国王たちに敵対するラテン語諸著作の偶像化、暴君や暴力的反逆にたいする賞賛といったものであり、それらはデンマーク王国の官吏にとってきわめて不適切な児童教程である、そう私は考えているのである。

しかし、今は私がこの点でまったく間違っているとしてみよう。したがって、私がかくあるべしと思う責任あるデンマークの聖職者や愛国者になるのに利用されるラテン語文法や作文練習、新約聖書の古典語講読やラテン語注釈に私自身が感謝しなければならないとしてみよう。そうすると、デンマークに愛着をもつようになるかどうか、デンマークの民属・民衆や母語に親しむようになるかどうかは、ラテン語文法や文体において、[より一般的に]学校への通学において自明であるわけではない。だから、少なくともデンマークの官吏を育成する我々の教育施設には欠陥があることになる。つまり、とくに聖職者官吏や法務官吏のなすべきことであるが、官吏はデンマークの民属・民衆の生活、市民生活に活発に働きかけるべきであるが、そうした官吏育成の教育施設に欠陥があることになる。この欠陥は、母語をもっぱら用い、全員が母語で国王や民属・民衆、祖国を問題にするホイスコーレ、デンマークの民衆生活および市民生活のためのホイスコーレがなければ、きちんと是正できないのである。

すなわち、デンマーク語学芸とまったく対立するラテン語学芸に親しみ習熟することと、概して暴君的で、国王や民属・民衆に敵対的なローマによく親しむことが、あらゆるデンマーク的なものを好むことであり、それと親密になることなのだ。なぜなら簡潔な対立命題は最良の仕方で相互に解明しあう(*opposita juxta posita magis illcescunt*)のだから⁽¹⁹⁾、という主張がなされるとする。だが、そうすれば中途半端になって、ラテン語による育成をまさしく嫌悪の対象とみるデンマーク語の育成は偶然に委ねられることになるが、それは危険極まりない冒

険である。このことは否定できないことだ。というのも、そうした[デンマーク語を用いた育成への変化]が起こらなければ、つまり我々がラテン語作文や会話を、よく学んでいればいるほど、ラテン語を十分受け入れれば受け入れるほど、そのぶん我々は明らかにデンマーク王国の官吏にはふさわしくない。さらに、我々がローマ的見方や考え方、ことば使いを内面的に自分のものにすればするほどデンマーク王国の官吏にはふさわしくない。そうした[ラテン語作文やローマ的見方等]はデンマーク人の性格や母語、関係に官吏にまったく疎遠であるだけでなく、それらに敵対的だからだ。少なくとも私ですらこの三〇年のあいだ、ローマとラテン語とを私から一掃するために意を用いてきた。それは今ではおなじみのことであろう。このことは、私が基本的に他にすることがなく、[この課題に努力して]怠惰に暮らしていなかったとしても、それでも多くの観点から見てまだわずかな成功を収めたにすぎない。したがって、デンマーク王国の官吏にとって、その誰にも欠くことのできないデンマーク的性格への迂回路なのだ、危険なアッピアの迂回路⁽²⁰⁾なのだ[という自覚]を、つまりラテン語の迂回路なのだ[という自覚をもって]官吏にその道をことさら[注意を与えて]歩ませることが適切だと見なせるのなら、古典の地からの帰郷であり、ローマ的思考法やラテン語作文から改心する課題はきっと可能なあらゆるやり方の動員によって彼らには容易になるにちがいない。祖国にたいして最良の意思をもった人々をさえ含む大多数の人々が、彼らの時代の全体にわたって祖国に疎遠になり、民属・民衆的生を共にする能力を欠き、ましてやそれを統治し、導く能力を欠くようなことがないとするれば、容易になるにちがいない。

それゆえ、かりに国立デンマーク語ホイスコーレが連合王国全体の[ラテン語派を除く]他の人々のために必ずしも必要でないとしても、それはだが幼児期以来のラテン語派には大いに必要であろう。ホイスコーレが一新されて、彼ら[ラテン語派]がすべての公職を解任されるような場合、彼らはデンマーク語で考え、話すにちがいないし、祖国とその憲法に誰よりもよく親しみ、それを愛するにちがいない。だがこうした事態は、ホイスコーレで彼らが、同時代の人々と生きいきとした仕方でふれあい、相互作用を行うことがなければ起こらないだろう。同時代の人々というのは、デンマーク語しか話せないが、経験によって、書物に記述されているものとはまったく違った仕方で、ましてやラテン語文献に記述されているものとははるかに異なる仕方で、大なり小なり祖国や民属・民衆の生活および市民生活に親しみ、それらを熟知している人々なのである。

さらに、将来の官吏たちは母語で、そのような生きた仕方の教育、つまり民衆や国を生きた仕方で熟知することが大いに必要であるだろう。我々が将来そうなるよう望むことであるが、彼ら将来の官吏たちがデンマーク的性格にけって敵対的ではなく、できるかぎり親しみをもってそれに接するような当面の教育訓練を受ける場合でさえ、母語による生きいきとした教育が必要であり、民衆や国を生きた仕方で熟知することが大いに必要であるだろう。すなわち、私は心から期待し真摯に希望するのだが、北欧ではラテン語文章家や古典的思索者、ローマのスポークスマンたちが官吏として望まれないとしても、聖職者にたいしてはつねに、聖書にたいする初歩的な知識、聖書原語の伝授が期待され、裁判官にたいしては法制度への熟知が要求されるだろうが、その一部は書物によって準備される必要がある。書物による準備は、誠実さに駆られて行動する若年層においてはつねに、ある種の妄想やよそよそしさ、生硬さを意味する。それらのものだけがフォルケリ・ホイスコーレにおいては必ずといってよいほど

[生けるものとの]相互作用を引き起こすだろう。このことがじっさいに有能で有益であろうとするデンマーク王国の官吏全体に適切なものであるなら、彼らは王国の官吏であるとともに、民属・民衆的な官吏であらねばならない。それが彼らにとっては高位の聖職的官吏、世俗的官吏への適切な準備教育にならないとしても、彼らは民属・民衆的であるにちがいない。そうした場合の高位の官吏たちは普遍的で、徹底的な政策に大きな影響を必ず与えるのである。彼ら官吏たちが今暮らしている民属や国についての生きた知識がぜひとも必要である。そうだとすれば、彼らがあらゆる時代に必要であったし、理性的に見て必要であるだろうものについて、できるかぎりはっきりと展望できることと合わせて、民属や国についての生きた知識情報が必要であるとすれば、彼らが最良の意思をもつにもかかわらず、民属・民衆の期待と国の遺産とを失うべきでないとした知識や展望は今においても、次の未来においても二重に必要なものである。すなわち、最初に四〇〇年にわたってラテン語教会や教皇権が民属・民衆の力を弱め、次に三〇〇年にわたってラテン語学校とローマ法が民属・民衆の力を弱体化させて以降、民属・民衆の生活は調子はずれになり、その立法は膨れ上がって混乱し、王と民衆にとって等しく不可譲渡の自由を制限してきた。だから、先の知識や展望は今日と次の未来に二重に必要なのである。我が国のすべてにおいて、高位の官吏も下級の官吏も、思考過程の自然さや母語の純粋さがまったく回復不可能なまでに粉碎されている。そのような状況下にあって、我々は、疎遠なものや敵対的なものが国や連合王国に与えたすべての損傷を十分に評価することさえできないし、ましてや最良の意思によってさえ、瞬時にしても一世代かけても受けた損傷を治療できないのであるから、我々の考察が高位の官吏の準備育成に制限されたとしても、よりよい時代を見通すにはできるだけ大々的に、生きいきと国の若者が相互作用を行うように努めるデンマーク語ホイスコーレがまったく必要でなければならない。こうしたことは我々には簡単にわかつていうものである。

だが今度は、デンマーク語ホイスコーレが可能なかぎり国立であり、自由かつ民衆的で、官吏たちの陶冶形成に必要な[という問題が提起される]。思うに、大部分の民衆は官吏になる意思がないか、なることができなくても、自分たち自身と官吏たちとを扶養しなければならぬのだから、そうした大部分の民衆にとって[デンマーク語ホイスコーレがそのような国立という施設のあり方をする]必要はない。そもそも民属・民衆の根であり幹である大小の規模の自由借地農民や自営農民、あらゆる種類の職人、船乗り、商人が、鋤耕しながら得る情報、仕事場にあつてかマストに立つか八百屋の店頭で得る情報とは別の情報、別の啓蒙は必要ない。このように粗野な人々や暴君は考えるにちがいない。

しかしながら、こうした発想は諸々の国王と民衆にあつてはけっして北欧的な思考様式ではなかったし、そうなりえなかった。なぜなら、ほかの場所ならいざ知らず、北欧で我々はすべて「ひとつの血族⁽²¹⁾」であり、あばら家に住もうが大邸宅に住もうが、陶冶形成にたいしては我々には同等の素質が存在する。この自然な一体性、自然な平等性は今はまさに北欧諸国においてのみ存在する。北欧諸国では、外来者が侵入して原住民を奴隷にすることがなかったのであるが、そのことを我々は十分よく評価できていない。なぜといって、自然な一体性、自然な平等性⁽²²⁾は、それを欠いた仕方でも可能であった[他の諸国の]祖国愛とは異なる深い祖国愛を与えてくれるし、通常とは異なる真の民属・民衆的な陶冶形成を可能にしてくれるからである。全体としては陰鬱な我が国の学校史には、それとは違った光源がなかったと

しても、まさに宗教改革以来の学校が、とくに[絶対王政導入の年である]一六六〇年に自由になって以降、まったくみすばらしいあばら家に生まれた未成年男子を自由にし、いわば高貴にできたこと、したがって、その男子が最高度の発達過程に歩みをすすめて、最高の地位に登れたことは否定できない。こうして、フュン島出身の新興小農の息子が我が国で最も偉大な文法家になっただけではなく、ヨーロッパの最高の言語研究者のひとりになったのである。もし万一彼の言語研究が[死せる]文法および文字制度の誘惑すべてに打ち勝つに足る生と精神とをもつものでなかったとするなら、彼を弱くしたのはまさにラテン語学校だったであろうことは明白である⁽²³⁾。それゆえ、この太陽の下に母語を用いるホイスコーレにふさわしい民属が他にはなかったとしても、デンマーク人はその民属に該当したのであり、他の民属にあつて政府による庶民の啓蒙や愛国的な陶冶形成への配慮が期待できなかったとしても、デンマーク人にはその配慮がなければならなかったのだ。この点でデンマークの民属の父長である代々の国王は、ヨーロッパのすべての国王が模倣すべしと期待したような模範だったのである。

[自然で愛国的な啓蒙]

しかしながら、デンマークの民衆がその心に基づく陶冶形成に価するという点にわずかも疑いがまだあるとすれば、すなわちそのことにたいするデンマーク国王の認識や、国王による国父長にふさわしい配慮に依然としてわずかも疑いがあるとすれば、その疑いは払拭されるだろうことは否定できない。つまりフレゼリク歓喜王⁽²⁴⁾がシェラン島とユラン半島それぞれの古都[ロスキレとヴィボー]に召集した自由な民衆評議会にあつては⁽²⁵⁾、疑いは輝かしい仕方ではないが、少なくとも喜ばしい仕方では払拭されるだろうことは否定できない。というのも、愛国的啓蒙の拡大が我々の時代にあつて民衆評議会をたしかでそれ相当のきちんとしたものにするのは、陽光に照らして明らかだからであり、国王陛下がまさに生のための民衆学校および市民学校にかんする請願以上に意識的に耳を傾けたものがなかったこと、こうした状況が自ずと生まれたからである。

すなわち、我々が生きているのは知性の時代であり⁽²⁶⁾、人々は自分たちが望む知性をもって生まれるとまではいえないにしても、我々はすべて、各人自身に独自の頭[で考えたこと]にしたがうという激しい衝動を保持しているとはいえるだろう⁽²⁷⁾。したがって、この時代に時宜にかなう仕方では庶民の啓蒙、とくに市民評議に配慮がなされないなら、[知性の時代にかかわる]誤解が今ほど大きな害悪をもたらしたことはなかったし、その今後も大きな害悪をもたらすであろう。これにたいして[庶民の啓蒙と]市民評議は大多数の秀逸な頭脳を、民衆の頭にかぶせた黄金の帽子のもとに、すなわち国父の王冠のもとに結集できるのである。

しかしながらそのような啓蒙はまた、真剣にそれを推奨するキリスト教によっていたるところで、多かれ少なかれ成功している。[とはいえ]私は[この啓蒙が]我々の北欧以上に成功しているところはなく、デンマークのようにまったく良好に進んでいるところはほとんどないと確信している。すなわち、デンマークには[キリスト教への]強い情熱が蔓延して混乱が生まれることは比較的少ないのである。だがしかし、呑気さや轻信という危険な宿敵がいるから、先の啓蒙が無視されるか誤解されるなら、この呑気さや轻信がその敵手[である真摯なキリスト教]に打ち勝つであろう。

ところで、比較してみるとデンマークで啓蒙が無視されている状況はまったくないが、しかし、

これまでのところ明らかに成功していないところがある。というのは、その啓蒙は天上や論理にかかわるドイツ的理解のすべてを手に入れようとはやり、官吏たちもまた全世界についてのローマ的理解にはやり、だれも健全な理解である常識を得ようとしていないからである。換言すれば、我々のもっとも身近にあるものについての健全な理解、すなわち我々自身の本性や祖国の状況、公共の福祉についての健全な理解である常識を得ようとしていない、市民的観点において「ひとつの必要事⁽²⁸⁾」であるだけでなく、通常のデーン人が理解できる唯一のことがらである公共の福祉についての常識を獲得しようとしないのである。

それゆえに、大多数のデーン人が彼ら自身の地位や職業、生業の外側にある、地上的で現実的で市民的な事象についてまったく理解していないこと、自然のおよび市民的事象全般にかかわるいわゆる知的理解のほとんどすべてが、少なくともデンマークで用いられるかぎりでは誤解であること、こうしたことは驚きではなく、先の誤りの必然的な結果であり、悲しい結末である。すなわち、そのことは我が国が歩んできた歴史径路にしたがえば、概して人々が獲得しようと努力する人間本性および市民的諸関係にかかわる、さらに普遍的福祉にかかわるローマ的思考様式ないしドイツ的思考様式のどちらかであるにちがいない。ちなみに、普遍的福祉あるいは公共の福祉は[ローマ的、ドイツ的思考様式の意味では]、デーン人が通常はごくわずかしか成功を収めていないことがらで、それが最良の仕方でも成功すれば、最も危険な誤解を生むにちがいない。というのも、かりにローマ的およびドイツ的思考様式がそれぞれの郷土で、歴史の教えるように十全の調和と市民的幸福とを創造したとしても、その調和や市民的幸福はデンマークのような非ドイツ、非ローマ的な一民属にあっては、まったくの害毒になるだろうからである。

しかしながら、大多数の人々にあって自然で愛国的な啓蒙が疎遠な思考様式をただちに除去し、その他[少数]の者にあっても疎遠な思考様式を無力化し、市民的観点で無害なものにすることがなければ、自然的事象や市民的事象についての奇妙奇天烈な思考様式がこの後にもたらすであろうし、もたらすにちがいない[未来の]災いと比べれば、それがこれまでもたらした災いなどちっぽけなものにすぎないだろう。だが、[愛国的な啓蒙の]ように穏健で喜ばしい啓蒙もまた、知性の時代においては、その場が与えられれば自然必然的に発展するにちがいない。というのも、すべての生ける知性あるいは生にかかわる知性は、我々のもとにあるひとつの感情、光に向けて湧き起り、それ自身にとって明瞭になる感情に他ならないからである⁽²⁹⁾。デーン人がそうした感情に対応する知性、すなわち数世紀を通じてごく穏健で平和的で、誠実な民衆が表現してきた感情に対応する知性を得るとすれば、死すべき者たちにあってデーンの国王の幸運を妬まない者がいるだろうか。デンマークに住みたいと希望せずに、いった誰がよき時代に生き、その時代を眼の当たりにしたいというのだろうか。ほとんどすべての外国人が考えるように、ひとつの民属の幸運は、その民属が自身の立法者であることによるのではなく、その法が「公正で至当⁽³⁰⁾」であること、政府がそうした立法を行う榮譽を保有し、その法を維持する権力を保持することによる。[デンマークを別として]こうしたことが全世界のどこで以前から洞察されて喜ばしい合意になっているだろうか。私は確信をもって問うのだが、全世界のどこで、これらの重要な真理が早くから洞察され、心からの賛意を得られているであろうか。我々の時代において、こうした真理が民衆の不幸であり主権者の不幸だというように一般に誤解されているのだが、いったいどこで、この真理がいち早く洞察され、心から

の賛意を得られているであろうか。そのことについて最深の感情を抱いた民属・民衆は厳粛に、国王に無制限の絶対権力を家父長的行使のために委ねたのである⁽³¹⁾。私は改めて問う、絶対王権がその無制限の権力の家父長的使用によって、民属・民衆の自然な性格の啓蒙と共通の福祉とに基づいてすべての法と組織を転換して榮譽を得ることがいっそう確実であるような国はどこにあるだろうか。民属・民衆の自然本性が主権の生の泉であるような国が他のどこにあるだろうか、絶対的な国王が何百何千という国父的な配慮の証明によって、自由意思で国の評議にさいして民の声を選び用いることで仕事に榮譽を受けるような国がどこにあるだろうか。

じっさいに、民衆の耳が国王の口元にそばだてられ、国王が耳を低くして民衆の口元にそばだてるデンマークにおいて、自然で愛国的な啓蒙に近接して最高の市民的至福にいたるすべての地上的条件が存在するので、天が恵みを与えてくれるなら、そのような自然で愛国的な啓蒙が必ず国王には名誉となり、民衆にとっても喜びになるにちがいない。そして私は最後に問う。神自身が創造した自然や、神の摂理が秩序づけた諸関係にかかわる穏やかで親切な啓蒙のための努力が、デンマークにおいてどこで天の恵みを確実なものにするだろうか。この国では天の恵みは眼に見える仕方而降り注いだし、数限りない危険を食い止め、あらゆる不運を緩和した。我が国が以前に古い王道から離れてさまよい、我々にはあまりに高く掲げられたもの、あるいは所持するに値しなかったものを求めて手探りで進んださい、[天の恵みによって]数限りない危険が食い止められ、あらゆる不運が緩和されたのである。

こうして、デンマークの豊饒な大地と幸運をもたらす星々を思い起こすことで、私はフォルケリ・ホイスコーレにたいして我々が希望を抱くことに逡巡するものではない。その希望は、全世界の他の諸民属と我々とが共有するものではなかったが、けっしてしばむものではなかったからである。さらに私は、その希望が家庭的および市民的至福のために開花するという明るい見通しに逡巡するものではない。その至福は比類のないものではあるが、それゆえにこそ高くつくことはないだろうからだ。私は逡巡を止め、喜ばしき考察に向かいたい。デンマークを仕合せにすること、それに役立つ可能性のあるすべてのことを望んでおられる国王陛下に、国立デンマーク語ホイスコーレがその課題にとって有用であるとあえて信じていただけるなら、我々はすぐにでもそのホイスコーレを保有することができる。ホイスコーレはたしかに、きわめて不完全なものではあるが、つまり地上における人間的なもののすべての出発点にあるにちがいない不完全さはあるが、しかし現実には、完成させることのできる施設が[ソーアのアカデミーには]すべて備わっているという喜ばしい考察に向かいたい。私は逡巡を止め、喜ばしい考察へと進みたいのだが、しかし私はあえて、できるだけ好意的かつ大胆に、生のための学校計画にかんする私の確信を表明し、その後、そうした喜ばしい考察へと進みたい。たしかに、この学校計画は民属・民衆の自然本性やあらゆる時代の経験に反しているが、しかし、この計画はそれ自体で独自に民衆の声に支えられているように思えるのである。

[数学という煉獄]

すなわち、私が[私の学校計画と対比して]眼の前に思い浮かべているのは[実業的な]市民的男子学校で、それはラテン語学校が死せる言語に基づくのとまったく同様に、精密科学的であり数学に基づくものである。私はその学校についてはほとんど懐疑的であったのだが、

その学校に見られる、市民社会の利益についてのドイツ風の教授的理解を冷笑しながらも、この学校の市民的死というおぞましい仕事場が我が国の必要とする生のための学校だとして我が国の民衆の声によって、激賞されるようなことがなかったのであれば、[実業的市民的男子学校については]沈黙をもってやり過ごすだろう。すなわち、私ほど民衆の口に反する作家のペンの無力を、あるいはそれに当たるようなことがらの無力を深く感じている者はいないだろう。だから、この新しい[市民的男子学校という]実業学校が[民衆の声に即し、]デンマーク語ホイスコーレの妨げにならないかぎり、私は、その学校をまったく知らなかったかのように認めるにちがいないし、[そのさいに市民的男子学校の本質の誤解にたいして]民衆の声を正し、あるいはその誤解を解き明かし啓蒙することは、その[学校の]経験やホイスコーレ[の活動]に委ねるにちがいない。だから今、[市民的男子学校を認めたいうで、]私がむしろ必要上努力しなければならないのは、そうした[市民的]数学的男子学校⁽³²⁾が少なくともデンマーク語ホイスコーレの代替施設として歩むものではありえない点を、すなわち喜ばしい諸効果をもたらす唯一のものではない点を示すことなのである。

基本的にこの点に考察を自主的に限定することで、私は余談としてだけ、ラテン語男子学校自体がそこに所属する教授にとってさえ不得策であり、実業活動に勤しむ市民にとって大いなる不幸にちがいないことを注記するにとどめよう。余談としてのみ付け加えるが、不適切な仕方で育成された官吏のいる国が被る損害は、それがどんなに大きかろうとも、市民の魔術感染状態の不幸に比べればわずかなものである。つまり、何ごとかを為そうとまったく考えないか、あるいはたんに読んだり、黒板で計算したり、図形を書いたり、理性的推理によって結論を導いたりするのを好むだけの状態、そうした魔術感染状態の不幸にくらべればわずかなものである。というのも、最終的に忘れてならないことは、ひとつの民衆・民衆を純粋な[大学]教授や純粋な官吏、純粋な貧民に分解することの意義はいっさいないからである。彼らすべては、文字通り霞を食って生きることができないのだから、そうした[純粋な専門家への]分解はまったく有意義でないということである。最後にもうひとつ、先の余談でのように、市民的事業を広げ、繁栄をもたらしたイングランド人や各国民が、そうした目標に到達したのは数学的男子学校によってではなく、その学校とは相容れないものによって、つまり身体的活動の喜び、市民的職業の保持、幼年期以来の独立的立場の希求によってであるという不動の事実を指摘しておこう。これに反して教養あるドイツ人は、彼らの日常的職業や市民的営為を学問的に高邁なものにしたにもかかわらず、事業活動も繁栄もともに損ねることを経験した、つまり彼らが[ラテン語の]牢獄に繋がれることになろうとも、他人を犠牲にして「確実な生活の糧」を追求する恐ろしい快樂が日々高揚するのを経験したのである。

すなわちたしかに私もまた、通常の仕方でデーン人とはじめて話したさい、他のすべての諸国民にとって数学がプロトナトスの財布であり、賢者の石であり、喜びの泉であっても⁽³³⁾、デーン人にとってはそうでないと主張しても、誰もそのことを教訓として簡単に受け入れはしないだろうと確信している。だが私は、三〇年以上にわたる作家生活のなかで、諸々の書物を著すことで人々との対話が行われ、民衆との対話が行われるという妄想を、優れた仕方で治癒し終えている。私の大部分の本とはまったく正反対に、本が[多くの人々に]読まれるとしても、本を書くことが人々との対話になるという妄想は私には治癒済みことである。だから[本を著しても]私はただ、すでに述べたように、「わずかだが貴重な人々に向けて」主要な問

題が何であるかを注記するだけであって、大多数の人々にとっては、真つ暗闇のような文の運びにしてしまうのである。

これにたいして、ラテン語学校がデンマークの官吏の能力形成にとってよい意味での迂回路であると一般に考えられてきたのと同じように、数学的男子学校が市民的事業活動にたいしてよい意味の迂回路であるとしても、この学校はそれを終了した人々にとっては、たんに迂回路であるにすぎないことは明らかなはずである。私にはそう思われる。だがこのことは、そうした多くの数学的男子学校に投入される費用を考えあわせると、我々の眼には暗澹たるものに映るにちがいない。数学的男子学校が受け入れ可能なのはたんに我が国の商業都市部の住民全体の子弟だけで、農村部の多くの人々の師弟は取り残されてしまう。だが、後者の師弟が粗野なままに放置されることは許されない。同様に、数学による煉獄を卒業することが市民的事業活動の迂回路としてどれほど優れていよう、少年たちが数学から再び落ちこぼれ、諸々の計算や証明を棚上げにし、本の虫というあり方のすべてを頭から追い払い、熱心に日々の衣服を気遣い、そして各人の営為にとらわれ、それらに専念するとしたなら、数学的男子学校はそうのように[多くの師弟を粗野なまま放置することに]なるだろう。このことは私には明白だと思われる。というのも、そうでないなら、彼らはせいぜい数学教授ないし、同種の学校教師の資格をもつだろうし、そのことで我々をはるかに大規模な仕方で、ラテン語サークルと同様の仲間を、すなわち学校出席や試験、ある種の勉強仲間を得るだろうが、そのことが国の最も乏しい[財政的]資源を使い果たすことはいうまでもなく、[人間という]もっとも豊かな資源でさえ使い果たし、消耗させることになるだろうからである。

しかしながらまさに、幼年期を教室で諸々の本や黒板、ペンやインク、さまざまな種類の悪ふざけで過ごして浪費するなら、全体として他の人々の経済支出に頼りながら情緒的で怠惰な生活に埋もれているなら、ハンマーややっこ、斧やのこぎりを手にし、あるいはロープや水夫樽を手にして熱心に働くことは簡単ではないと経験は教えている。あるいは、全体として[学校卒業の後に]、いわゆる「粗野な仕事」や低い地位、市民的事業活動と繁栄とが要求するのと同様の通常の忙しい生活スタイルによって熟練が形成され、仕合せが感じられることは容易ではないと経験は教えている。だから私には、最良のデンマーク語ホイスコーレをもってしてさえ、数学的男子を市民的な意味で期待溢れる若者に変えることができるかどうか心もとないのだが、いずれにしても、そうした[市民的な若者への]改造のためにホイスコーレがまさしく必要だという点は、私には明白であり、解決済みのことがらである。

だがしかし、その課題は別途の問題としてここでは措き、数学が奇跡的にではあるが、男子にとって勤勉や謙虚、質素[などの性格の開花のため]の訓練になるとして見よう。それでも、数学は彼らの祖国愛を覚醒させはしないし、育てるわけでもなく、男子たちを民属・民衆的生活に親しませるわけでもなく、彼らの年齢に必要な歳月を重ねさせるわけでもない。つまり、人間本性や市民社会について我々と談論することが有害ではなく有益であるからこそ、[我々の生が]必然的に背景にもたねばならない歳月を重ねさせるわけでもない。だから、数学的学校が未成年男子の年齢で終わっても、青年期にはまさしくフォルケリ・ホイスコーレが必要であろう。そうだ、通常そうしたホイスコーレが必要なのはあまりにも自明である。児童の知性が発達し、理解が広くなればなるだけ、自惚れや現実の生にたいする誤解、未成年男子には経験的に未知の生にたいする誤解も増幅するだろうから[それを是正するフォルケリ・ホイスコーレは必要な]のである。

[奴隷なき民属・民衆の陶冶形成に向けて]

だが、私はここで考察を中断しなければならない。というのも、こうしたことのすべてがどんなに明瞭であっても、つまり強い北欧的性癖によって三〇年来、疎遠で技巧的な思考様式全体を終焉させるために努力してきた私にとって[上記のことが]どんなに明瞭であっても、私のペンはこのことを深くローマ的思考様式に執着する読書世界にたいしてほとんどわからせることはないからである。ローマ的思考様式は通常、「教養ある世界」がローマへの人だかりとみなされる場合、それがたんに[人々の]寄せ集めであるにすぎないことを予感することがない。だが、ローマへの人だかり[としての教養ある世界]は他の世界全体を自覚的に奴隷化するのであり、奴隷なき民属・民衆⁽³⁴⁾においてはまったく無用の長物である。民衆は額に汗して自らのパンを働いて得て食わねばならない。官吏や学者たちを扶養することができるのは、これらの人々の生と努力とが公共の福祉にも貢献する場合だけである。こうした奴隷なき民属・民衆が知性の時代に官吏や学者を扶養する気持ちをもつのは、民属・民衆的な共通啓蒙が常に奴隷なき人々相互の切磋琢磨を保持させ、市民社会を尊重し、さまざまな地位と立場の長所や問題点をお互いに比較しあい、その一方で人々がごくわずかであっても高貴になり、[人間的に]向上する陶冶形成を獲得する場合だけのことである。

我々の時代にあっては、声が哽れるほど自由や陶冶形成、教育訓練が叫ばれる。そのことはなるほど我々すべてに必要なことである。しかしながら、そのことのためになされている通常の諸々の提案は、プラトンの『国家』と同じ根本的な間違いを犯している。この著作では、自由の保護者と陶冶形成の保護者とが、自分たちのために自由と教育との両方を飲み込んでしまい、それゆえに、民衆は彼らの厳しい勉強によって、したがうべき徳や美の全体の影を得るのだが、しかし現実には付きしたがうべき暴君、養うべき誇り高い暴君を得るにすぎない⁽³⁵⁾。賞賛や偶像崇拜が彼ら民衆には慰めでありえるとしても、そのさいに得るのはまさしく誇り高い暴君なのである。

(訳： 小池直人)

「生のための学校」テキストおよび訳注

原テキストは N. S. F. Grundtvig (1838), *Skolen for Livet*, i: G. Kristensen og H. Koch (red.), *N. S. F. Grundtvig Værker i Udvalg*, Bind IVからのものである。グルントヴィは一八二六年にH・N・クラウセンとの論争をきっかけに当局から著作の検閲処分を受けたが、この処分が一八三七年のクリスマス前に解除される。この後、グルントヴィは彼の著作『デンマークの四葉のクローヴァー』（一八三六年）を興味深く読んだデンマークの皇太子（後のクリスチャン八世）との謁見の機会を得、そのさい学校制度の改革やソーア・アカデミーの役割などについて彼の思想をいっそう深め、具体化するよう要請を受けた。このことが本論文「生のための学校」の公表につながった。当時、この論考がとくに通目を浴びることはなかったが、後世の教育理論形成にたいするグルントヴィの最も顕著な貢献と見られるようになる。

- (1) この詩片の起源はサクソーの『デンマーク人の事績』（一五一四年）とも、独訳注ではペル・シューの『闘争歌謡集』（一六九五年）ともされるが、ここに訳出した底本（*Grundtvig Værker i Udvalg*）では『グルントヴィ詩集全九巻』の第四巻に収められた『デンマーク、素晴らしき野や牧場』から採られたものとされている。なお、チュラ・ダネボ（Thyra Dannebod）は、ユラン半島のイエーリンの碑文よれば、イギリス王家出身でありゴルム王と結婚した。彼女は南ユラン半島に置かれた南方への備え、「デーンの防塁」の建設を命じたともされる。詩文中のダネボはその意味でデンマークの美辞と考えられる。
- (2) 「我々の書物」とはルター派の教理問答集を意味する。
- (3) ロスキレはシェラン島、ヴィボーはユラン半島にある古くからの地方都市。デンマークの絶対王政は一九世紀の民主化の過程で、一八三一年から一八三四年に連合王国内の四つの都市で身分制地方評議会を設立した。その二つがロスキレとヴィボーであり、その他は南ユランのスレースヴィ市、ホルシュタインのイツェーエである。
- (4) この表現は新約聖書、マタイによる福音書第七章の一四にいわれるいわゆる「狭き門」を念頭においている。
- (5) グルントヴィが男たちを「頭」としてとらえ、知性的で、活動的で、公的責任を負う面に長けていると見なす一方で、女たちを知恵の持ち主、つまり慎ましく誠実で、心があり、精神的に感受性が強く、人情にあふれる面で長けていると考えたとしている（cf. *The School for Life: N. F. S. Grundtvig on Education for the People*, edited by E. Broadbridge, C. Warren and U. Joans ed., Aarhus University Press, 2011）。こうした見方が一九世紀という時代に制約されたものであることは事実だが、それでもグルントヴィは自らの聴衆のなかで女性を第一の彼の理解者にとらえていた。
- (6) 「デーンの女」（Dannekvinden）の「デーンの」（Danne-）は「デンマークの」という意味だが、同時に「立派な」「大胆な」「誠実な」といった意味も含まれている。
- (7) 「スコラ的なもの」とは、中世哲学以来の学問スタイルの特徴である。ここでは問題を詳細に理詰めで論じる方法と考えてよい。
- (8) グルントヴィはここで「母なるデンマーク」、すなわち国民の精神と女性性の理想に言及している。しかし、彼は同時にグルントヴィ派となるクリスチャン八世の妃、カロリーネ・アマリエ

- (Caroline Amalie, 1796-1881)との近い関係をヒントにしていると思われる。
- (9) グルントヴィが受けていた執筆検閲処分のこと。
- (10) ラテン語派の見解からする、グルントヴィへの皮肉の一例。
- (11) 当時の著名なアメリカの詩人であり作家、ロングフェロー (H. W. Longfellow, 1807-1882) とイルウィング (Washington Irving, 1783-1859) のヨーロッパ滞在にたいする揶揄 (cf. *N. F. S. Grundtvig: Skrifter in Auswahl*, herausgegeben von K. E. Bugge, F. Lindgreen-Nielsen und Th. Jørgensen, Vandenhoeck & Ruprecht, 2010)。
- (12) 「吟唱詩人」「サガ語りの人々」。吟唱 (スカルド) 詩人は古代北欧の韻文詩を読む詩人のこと。グルントヴィ自身がこうした自己規定を与えていたことは多くのテキストが示すところである。サガは中世アイスランドの散文作品群の総称であり、ノルウェーやアイスランドで起きた歴史的出来事を伝えている。
- (13) 「ドイツ的構想」とは現実に先行して (理論) 認識に言及するものである。たとえば、カントの批判的先験的方法は、認識に先立って認識を分析し、批判するものであった。
- (14) この分類は『国家的啓蒙』『生の啓蒙』風媒社) においても踏襲されている。
- (15) ロスキレとヴィボーはそれぞれシェラン島およびユラン半島の中心部に位置する都市であり、一八三六年に身分制地方諮問議会が設置された。この関係上、グルントヴィは教会学校やラテン語学校よりもむしろ、市民学校が必要だとする論点を提起した。
- (16) グルントヴィが「学者の共和国」というのは、大学とそこに属するスタッフ、学生に与えられた名称 (『生の啓蒙』の第二部、第三章も参照)。
- (17) 世界じゅうのすべての人々によって語られ、理解される仮説的な言語のこと。
- (18) デンマーク絶対王政の一般法を記した『デンマーク法』(一六三八年) を意味する。
- (19) 「対立命題は最良の仕方相互に解明しあう」は中世神学および哲学上の有名な格率。
- (20) グルントヴィはここで、ローマの街道で最も有名なもののひとつである、南に伸びるアッピア街道に言及している。
- (21) グルントヴィは「ひとつの血族」の表現を、人類の一体性はたんに価値や理念の共有であるのみならず、より根底的には「血」とよるという意味で用いるという。「血」とは我々に共通の祖先であり、創造の起源であり、身体的な共通点である。グルントヴィの思考がとくに通常の人間の平等や教育・福祉への関心に焦点を当てるのもこうしたところによるというのだが、この点はもちろん我々にとってはじっさいの検証を要する (cf. *The School for Life*, p.395)。
- (22) 「自然な一体性、自然な平等性」は <Natur-Lighed> の訳語。通常は「自然本性」「自然さ」とでも訳すべきであるが、デンマーク語の形容詞 <Lig> は「等しい」、「一体の」、「平等な」といった意味合いを同時に含んでいる。グルントヴィはこの二義性を巧みに利用してこのことばを用いているのでここでは「自然な一体性、自然な平等性」と訳した。類似の用例でとくに重要なのは「人間性」「人類性」を表現する <Menneskelighed> の概念である。その場合には人間とその本質的性格として平等や一体性という意味が含まれており、グルントヴィはこのことばに多義的な意味を込めて多用している。
- (23) 言語学者であり文献学者で、コペンハーゲン大学で文学史の教授を務めたラスク (Rasmus Christian Rask, 1787-1832) のこと。彼は、フュン島のオーデンセ近郊の小村

の仕立て屋の息子に生まれ、『古北欧語すなわちアイスランド語の起源にかんする研究』でゲルマン語派やギリシア語、ラテン語の子音に類似の法則があることを指摘し解説した。ところが、それがデンマーク語による論文であったため、学会で十分な影響をもちえず、同様の内容は後に「グリムの法則」として名を残したという。この点でも、グルントヴィがここでとくにラスクに言及した理由があると思える。

(24) グルントヴィがフレゼリク六世に付けたあだ名。

(25) 本テキストの訳注(15)を参照。

(26) 「知性の時代」はグルントヴィによる近代の呼び名の一つ。分析的、個体化的科学精神がこの時代を通じて、未熟な段階から英知への自然なルートを経る。すなわち自然な紐帯は自己中心的な自我によって解体されるが、しかし、その展開は自然な秩序の高次のレベルでの再統合へと向けられる。

(27) 周知のように哲学者カントは『啓蒙とは何か』で、啓蒙を「他人の指導がなくとも自分の知性を用いる決意と勇気」の問題として論じた。

(28) 新約聖書ルカによる福音書の一〇の四二を参照。

(29) グルントヴィにおいて知は、「歴史・詩的に」歩む。すなわちそれは「予感」というような不分明な感情から明瞭なものへと進展するボトムアップ的なものであり、デカルトのように端緒における明晰判明性は前提されない。この点は『世界における人間』『北欧神話記』『序論』等でしばしば言及されている。なお、この認識論はグルントヴィの従兄弟であるロマン主義の哲学者、H・シュテフェンス(Henrik Steffens, 1773-1845)のものとはほぼ合致している。グルントヴィがホイスコーレの知の生みの親をシュテフェンスだとしているゆえんである。

(30) 一二四一年のユラン法の前文からの引用である。

(31) デンマークは一六六〇年から一八四九年まで絶対王政であったのであるから、一九世紀前半のグルントヴィはデンマーク絶対王政の擁護者であったことになる。政治史家T・クヌッツセンはしばしば、デンマーク絶対王政が他の国々の同体制に比して合理的であり、腐敗度が低いことに言及しているが(*Den Danske Staat i Europa*, 1993)、グルントヴィの王政支持も「デンマークの四つ葉のクローヴァー」での論じられるように、このことに起因するといえよう。また歴史的視点からすると自然な体制として北欧古代では国王は選挙されていた。そうした共和主義的体制の回復という視座がグルントヴィのなかにあることは想定できる。とはいえ、やはり絶対王政支持の言説は議論や批判的検討を免れることはできないだろう。

(32) 「数学的男子学校」は未成年男子のための中等実業高校にたいする皮肉が込められた名称。

(33) 「プロトナトスの財布」「賢者の石」「喜びの泉」などのことばはいずれも尽きない富の源泉のこと。なお「プロトナトス」は中世後期の有面な民衆本の主人公で、その財布からいつでもお金が出てくるとされた。「賢者の石」は「哲学者の石」ともいわれ、錬金術において非金属を金にかえる触媒を意味する。「喜びの泉」は幸福が涸れることなく湧き出す泉のことであるが、デンマークの詩人バーエッセン(Jens Baggesen 1764-1826)「喜びの泉」(『ダンフォナ』所収、一八一六年)が念頭ににあると思える。

(34) 北欧史において農奴制度がないか、あるいは薄弱なものにすぎなかった点については

熊野聰『サガから社会へ』(東海大学出版会、一九九四年)を参照。

(35) 周知のようにプラトンは『国家』のなかで住人を、物的財を生産する階級、軍人階級、統治階級の三つのカテゴリーに分類した。最後の統治の任にあたるのが、真理を愛し、正しい判断を行いうる哲学者(いわゆる「哲人政治」)である。しかし、グルントヴィーにとってこのモデルは、民衆が真理に関与しないのだから、実際には専制あるいは独裁の理論になるとしている。

さらに学び進めるための参考文献

なお、これからさらに学習を進める上での入門書となる邦文参考文献を以下に掲げます。また、訳者はグルントヴィーのデンマーク語テキストも翻訳しています。かなり難解なものなので入門者の方にはお勧めしがたいところですが、本格的な学習を志す方には利用いただけたと思います。

- ・江口千春著／ダム雅子訳『デンマークの教育に学ぶ——生きていることが楽しい』(かもがわ出版、二〇一〇年)。
- ・コースゴー、O. / 清水満編著『デンマークで生まれたフリースクール、フォルケホイスコーレの世界』(新評論、一九九三年)。
- ・コースゴー、O. 著『光を求めて』(川崎一彦監訳、高倉尚子訳、東海大学出版会、一九九九年)。
- ・小池直人著『デンマークを探る<改訂版>』(風媒社、二〇〇五年)。
- ・コック、H. 著『生活形式の民主主義——デンマーク社会の哲学』(小池直人訳、花伝社、二〇〇四年)。
- ・コック、H. 著『グルントヴィー』(小池直人訳、風媒社、二〇〇七年)。
- ・タニング、K. 著『北方の思想家グルントヴィー』(渡部光男訳、杉山書店、一九八七年)。
- ・ポリッシュ、S. 著『生者の国』(難波克彰監修、福井信子監訳、新評論、二〇一二年)。

グルントヴィーの邦訳書:

- ・『世界における人間』(小池直人訳、風媒社、二〇〇九年)。
- ・『生の啓蒙』(小池直人訳、風媒社、二〇一一年)。
- ・『ホイスコーレ(上)』(小池直人訳、風媒社、二〇一四年)。
- ・『ホイスコーレ(下)』(小池直人訳、風媒社、二〇一五年刊行予定)。

著者紹介

ポール・ダム (Poul Dam, 1921-2000) :

コペンハーゲンに生まれフォルケホイスコーレの校長を務めた後、一九六四年～七七年までデンマーク議会フォルケティンの議員(SF:社会人民党所属)を務めた。一九七六年、七七年には社会人民党の代表。彼は一九四〇年から四五年のドイツによるデンマーク占領時代の主導的な抵抗組織デンマーク会議の秘書として政治的経歴をスタートさせ、それ以来、様々な職務を継承した。幾つかの省庁の委員会の秘書や委員も歴任したが、その間には教育省のフォルケホイスコーレ委員が含まれることは特筆すべきことである。一九五五年から六三年まではフォルケホイスコーレ協会評議員となり、六三年には同協会の議長を務めた。彼は同協会の週刊情報誌を編集していた。彼はまた様々な他の雑誌編集にも携わり、教育的著作や技術的著作、社会問題、歴史の著作を残し、同時にグルントヴィの政治的達成やJ・T・アルンフレッズ(戦間期デンマークのフォルケホイスコーレ運動の指導者)についても著述した。そのほか、翻訳家であり著述家、新聞のコメンテーターとして、文化や政治、教会問題にかかわって活発に発言し、民衆教育や教会のサークルで人気を博した。主な著書に、『北欧の人々』(一九四五年)、『私たちの税金、どう使われるか』(一九五八年)、『政治家グルントヴィ』(一九八三年)、『ニルス・ボーア』(一九八五年)などがある。



訳者:

小池 直人(こいけ なおと):

一九五六年、群馬県生まれ。現在、名古屋大学大学院情報科学研究科准教授。社会思想、北欧社会研究を専攻。主な著書に『平等主義が福祉をすくう』(竹内章郎他との共著、青木書店)、『デンマークを探る(改訂版)』(風媒社、二〇〇五年)、『福祉国家デンマークのまちづくり』(西英子との共著、かもがわ出版、二〇〇七年)など。主な訳書に、H・コック『生活形式の民主主義』(花伝社、二〇〇四年)、コック『グルントヴィ』(風媒社、二〇〇七年)、T・L・ホブハウス『自由主義』(吉崎祥司他との共訳、大月書店、二〇一〇年)、N・F・S・グルントヴィ『世界における人間』(風媒社、二〇一〇年)、グルントヴィ『生の啓蒙』(風媒社、二〇一一年)、グルントヴィ『ホイスコーレ(上)』(風媒社、二〇一四年)がある。